茶莚儀制　巻之一

ヲ彡 9
635
1

宗徧田中圖書

茶筵儀則序

古茶道之盛也珠光紹鷗尚矣世以茶鳴者有宗久焉有宗及焉有宗易焉比三子者一世總司以論儀則當是時他名于世者蓋亦多矣可勝既乎遠公宗於宗及而學之台織宗旦祖於宗易而學之遠公是古昔三子者之道於其儀則者一也雖然論其道統則各宗其所

門ヲ多9
號635
卷1-10

宗故宗及之道傳至遠公宗易之道延
及宗旦亦宜矣吁時好所變不過百年
而分流蕩世夫稱旦者非旦而讃遠者
非遠滔、汩、何日逢原斯二師不幸
矣豈惟二師實三子者不幸也余之嗜
茶叓也久矣嘗在南溟時有倡古織道
者追隨亡幾遊學京師傍適千家老者
視其所爲刻意時好而從易簡唯侘是

説爲人問難道辭託秘惡所謂侘者如何
僧清巖有侘辨則古亦可知也既及宦西
海問見談茶者非易則旦專事新奇古儀
寥々郎有稱遠公者亦惟汶、乎無足見
者説話東西多歧亡羊自余辭官來于
浪花弊屋圍爐幽懷自適猶幸得紫雪
先生者就審其道脉盖遠公之徒而實是宗
及之正傳也吞晨雪夜屢陪茶莚視其禮

遇之厚儀則之祥倍信其道之有由来也
哉於是執贄侍帳情誼相校旦莫肩随他
之所秘閑亦無隠時出一巻與予曰百箇條
是也古儀悉存矣余受讀之詞簡意邃
不易暁得數勞口受而後其台儀者皤如
也嗚呼三子者之道至於先生復粲於世
哉亦可謂盛矣先生年經知命嗣子尚
幼是以早抱先矣之嘆著書以代誨言

旦去聞茶意正道余讀其書折衷諸説
而歸正覺甚痛快此非敢空誇者也然
秘不眎人雖門生亦不許假借謄寫焉
立門間讀而讀之未嘗見有吝惜之色
矣蓋欲其記臆也余亦聴命之久筆記
盈篋因分為十巻目曰茶筵儀則唯取
茶儀之法則而已蓋眎人猶旦先生之
所不許也余何敢公題以傳家後之同

於我者寳茲囊秘

元文庚申春三月穀旦

掬弄軒陶國興書

茶莚儀則巻之一

茶乃御製物

一 茶乃湯物来ニ而廻状をし前ヶ日限窺の廻状
遣之

當月幾日 幾日毎日ニ付 粗茶差上度候
又遠の日限ハ御都合ニ而御示し可被下候

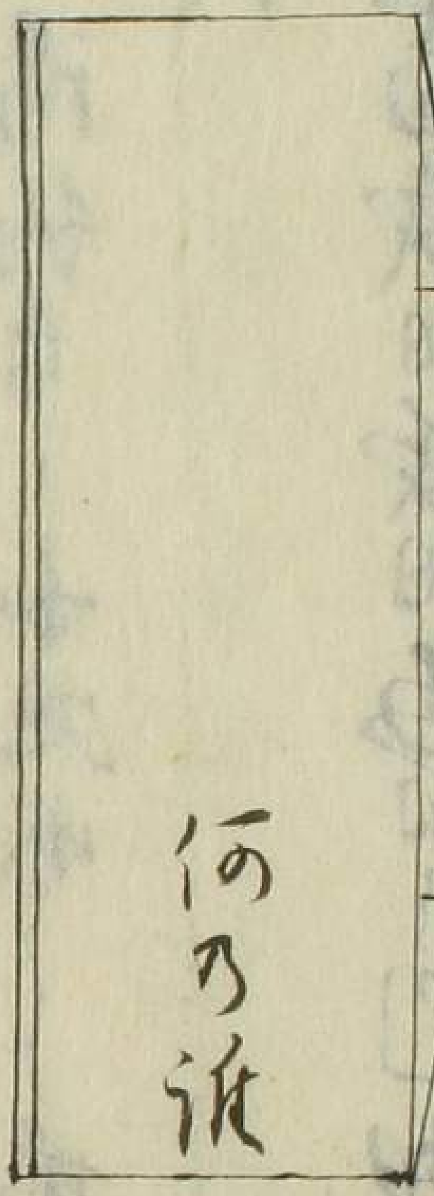
何月幾日

何乃刻揃 客の一座の連中也ほとし之候

但中殘りの〻読もる書造ひ之 大同書キ之記ニ而

模し量るへし

右客の廻状ハ壱枚紙の数々亭主より切文にし
て書奥より二ツにおり又四ツにおりて端紙を
二ツ折にしてをりたる方より折尾先下を折る
紙の横に西方より折上ケ一寸の外とも
但上ニ客様と筆ニ書くも其余方も好



上書の仕様ハ猶よく遠く今同案の折ぶにして
文以折ニ入候

一

但客衆のり紙を毎日にかきつけ候二日前より以て
何日ニ而とゆふまり伺ニ候へし

一 客より日指定申ニ而本廻状ニ候
但亭の湯點鈎の書状を亭主七日以前當日以前
又ハ三日二日一日前ニ而も又ハ當時ニ而も遣し
點鈎の日より伺有亭の湯を請筆一日
時の亭の湯ニ而御頼し前後亭主ニ遣し
奉存候
本廻状文言
粗茶進上申度旨自然御申越被成日限手透

云々御下大慶奉存候　然者明日何の刹那経
会御参詣被下候ハヽ可忝存候

月日　　何の誰

何乃某様　一座の連中へ申上候

又翌日は又其日初より相出来候事も有

文言

当番日粗茶進上度候ニ付何之刹那経会ニ付
御出席可被下候　以上

月日　　何の誰

何の何某様　一座の連中申上候

一 若組の内ニ而何事によらす家業ニ付難儀連中の時ハ其人家
ニ於て相催候

文言

以手紙啓上仕候　然は私儀家職不如意ニ付拙宅ニ於て来ル何日粗茶進上
仕度候間何之刹那何の御席へ御参会下され度奉存候
宜御聞済被下候ハヽ一同の本懐ニ候

月日

但切紙堅文ハ杉原ニ認候事　切紙ニ而も小書の
文も候ハヽ一帋認候とも月日の下ニ
書判又ハ名字書候　上ニ何乃誰様とも宛名書よ

何れ集と云人々の宛中の振合にて有へし
并ニ披露状ハ文言同し事之
但披露ニ申出候事 紙錦ニ入念之文庫抔なき
ときハ書ニ心得へし

一 品物の奉献多き時ハ中古大臣状として某より品物ニ
の上人々様御何十人之内一箇宛日限御申達候事ニ候
中古有之候ハ右之以後寄ニ成へ

文言

何月幾日何日迄之間一割品物相成申候
以後之日限之日迄ニ懸候ニ付而ハ奉行所迄

月日
次第不同
何の誰様 御何十人へ書たりし者也

一 寄方ハ我らく手遠路ニも古加は奉行所ニての辱
御宣家名ニ御座候

一 客ニ成て目精ニ書出候事ニ候而見合月二三ヶ世
相成人々ハ会開も客ニ成てハ深切の人ハ目精
兼見合申も有之ても之人ハ目精相用候へ共ハ立せ
会開外の日ニ申出候而新ニ精ニ成候寄合候て
示出文出申候様ニ被成候ハ不口惜候へハ会開也

一 廻文章の掛物より前後ニ及ふ時分ハ茶の湯あて
物語等よりも若より前後ニ及ひ其時ハ主客分別
り心文を読事も読み申候其子下ヶ座中ニ読み文言の分
無躰事ハ其式ニ入ハ悦人ハ却て迷惑成候て不苦候
所世ハ大方の迷惑事ニ御座候也
但心得文の読事ハ其心出候ハハ互ニ其式読事ハ心持と
右列ニ其読事ハ人々の心ニ其らずと
又障子穴等より出候ハハ時ハ其事同し
但夫より障子にてまいる時ハ其事ニ付不及沙汰
数寄屋路次の掃除

一 窓の立付の竹其外押縁も段打替候
但右竹抔ハ二三年段打替る十年抔も二三年也
一 雪障子之段
一 樹木衛手之乱を付蜘蛛の巣を掃ふ
一 屋根を洗ふ
但見事に苔付候を新口ありしと洗ひ候
一 石を洗ふ
但見事ニ苔付候ハ上をさらりと洗ひ候ハ猶宜し
一 下腰雪隠ニ薦を四方に切入
但是ハかへしもの候ても又ハ壷に何もなきハ不宜也

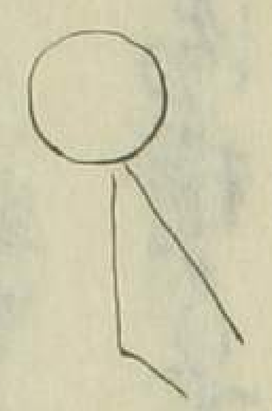
一 薦入板 遠州公ハ踏板の形ニ竪ニ又利休ハ踏板ニ透横
ニ入可ことに而候すれなりと見る也心為し又差と
細ニ切カ入たる也もし切竪ニ揃へ入るも

一 雪隠の内ハ必常の掛戸見合し竹の二寸ハ窓
の之腰板ニ可ハ据なり

一 手水鉢廻り清し洗
但し内ハ洗ニハ不洗内の洗板さらに洗事は
上ニつかまえてすへからす

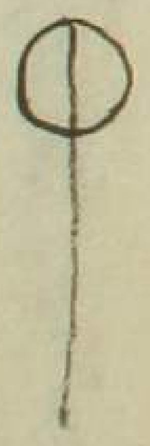
一 清めをこしらへ入客の気はぬ之手無用よし
但し手水鉢ハ夜まちの口露地次第手水鉢ハ客躙
掛ケ候内路次ニ水打戸前ニ清めを滴て入
よし

一 手水鉢ニ杓置事 水指ニ柄杓鉢ニ同じ



尤杓を鉢の水穴の先の正中ニ置て客見合
鉢の形ニより湯桶ちかく心を付へし
常の杓ハ口を横ニ置かけ柄ハ下向ニ置へし

杓口のさし渡し外法三寸深さ二寸七分厚サ
さハ柄長さ壱尺二三寸の間鉢の径たけも也分
ニ切柄の正目柄のまし四分厚サ三分半



ガ入杓口のさし渡し外法貳寸深さ壱寸八分厚サ

きか柄の長サ八寸余杉の柾目柄ハ口ハ厚さ三
分半

一 手水鉢の左の方ニ湯桶石右の方ニ燭石寒天の時ハ
中之石無湯桶石ハ湯桶出ス
　但古ハ老人病人の客なとなくしてハ湯桶
　不出ス　今世ハ用来若者ニも出候なり

一 湯桶乃寸法杉のへき板目三重巳きを三寸余厚サ三分

右湯桶の湯加減をひ比ニ冷め合ハ八分目入蓋をし
て手を横より目を見よして湯桶石ニ置杓ハ手水
鉢の杓を用ゆ
　但流しぎハ鉢の平き鉢ニて湯桶石ニ燭石も
　鉢ニ有りて兼用る事なり手水鉢ハ鉢の水穴の
　上ニ湯桶を吊して杓を掛置

一 水穴の寸法ハのさし渡し七寸深さ四寸底ニ水抜穴
ありて付る是ハ福禄寿一盃の水を容る寸法也
千家ハ口広く四寸底浅く是も水の入口程ハ開き
なり

出所毎方也角入

水口

蘭口濯て忘るゝかし心ゆ迄被成よし

庭の水かすり出しくみあ口のまゝて寺深寺也

一松有所ハ松の葉を敷事なり志ゟ候ハ宮

但此松なくハめ松の葉敷候ハヽ松の葉もまきちらしつき

其敷様ハ兎角を取寄日ニ干かし

湯をもて洗て取かへ能に松葉を暖めく敷也

之所一つをひとへ又ハ木の下なとにすさきなとをして

も敷色の趣なり

又松も無之所ハ此所ニ風呂乃前ハ敷松葉なり

一秋冬ハ風呂の時ハ竹の古葉ニ葉を物数之口切

時分ハ立用之是ハ三本の敷葉なくて外の葉をちり

しく事なし

一中潜乃内外を敷ゆくに不ニ限ル筆を敷候ても不敷候ても

不苦ハ無之候

但箒てき色の敷様ハ手もち篭敷の計の三寸廿箒の跡

露打ニ乎計ゟ打是ハ程々ニ不敷候也

仕方ハ様之

一豚高隈ニ束枝也

但暑氣ニハ三人ほと宿也一本外如常

一 雪隠にて刀を掛の方へかき上刀の上より掛の砂え
東杖をもたせかけて置へし

一 雪隠ハ大小用共ニ三段ニと並てよし 砂ぬき
石と石の間て砂を敷 下腹雪隠なくして 雪隠計ハ不
被成 雪隠なくして下腹雪隠斗ハ不成事有物也

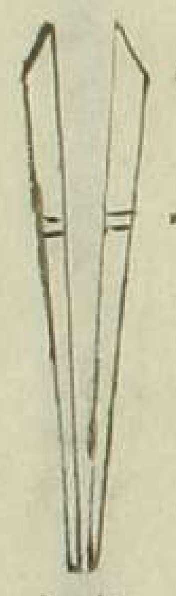
一 東杖寸法

杉の柾目糸面

一 塵穴ニ塵箸を置
但塵穴ハ内外の露地ニ掘ル 寛有穴乃廣さ尺ほど
深しくハ三寸本の露地ニ有木の葉なとすこし入置好し
無くハ何しても三寸目安とし 尺ハ中程にて一

一 塵穴ニ木の葉入置事 不時乃茶の湯ハ格別
兼日乃茶事ハ入置事為事也 但し塵穴の脇ニよする木の
葉ハなくてハ見苦事也 一ハかくハ入りておもし 或ハ遠
ニ来るの追又ハ中立の間かりしちりハ露木の葉捨ひて入
口へハ二三日程前の木の葉入置りて不苦事ハ三四日の有
事也

一 塵箸の寸法



塵穴ニ添へ腰掛よりあるせかけ置へし 腰掛なき所ハ
穴の二方よりもたせかけて置

一 塵穴なくとも ちりつまり三ヶ所ぬの所の根太の先の松葉

泉底ハ水のぬけさる様によくさし好

一 樹木ハ木石并雲隠の月何も水影へし
但雲隠の月水影ハ時宜ニ穴ましさる様ニ心を
其外好月かゝやき中も何し見れ

一 水のそゝぎしき事不苦候乍去時節ニ寄木末まれ
引候事ハ云同又暑気ニよりて一刻も永く一層水を
呈様成とも泉水打し好 此時ハ大樹の木末より打ても
好 代流によりて水のたけしき事を嫌ひ申候へ共 式方ハ
水のおとたけしき瀧杯ハ不苦候 水音のたけしき
ハ嫌ひしく候へ共 是も静か成庭の水音ハ不苦候 水音

たせ候も何しく候 雨ても打水ハ打しけれ 雨中
も同事ニ候へ共去きハ一旦の物数寄の沙汰也

一 水加減の中のましきハ路次ニよく見て猶段取べき
事也 第二ニ節ニかゝる時ニ候 根本好ニ候へ共 物珍の時
刻おもても不遣候 猶根本ニ致し候へ共 おくハ遠方をの
よりハかゝまきる所ニ而 遠見り至場等不苦候

一 中潜おしり上りの戸ニて外戸を閉候
但ゆるきを候 流の末をまわし様候よし

一 寒天の時又ハ雨中なとハ戸を閉し なをそのものハ
いそ付て不明事有 心を付て好 前ハいて付て不明時ハ

尤早ニハかへる湯を入てしきゐへ流し候ハ明かゝり

一 雨天之節ハ笠をぬき見る客の礼

但侍衆ハ見合笠ぬき候而針打候者ハ打針

尤も若衆の笠ぬき候の針なき者ハ雨天之時ハ見合て

一 笠を不掃不取ても亜然ても若衆針有之者ハ天

氣之時ハ雑亜ぬ時也笠なとハ時の可不叶抔也

一 但座敷之節笠ハ不揚除如く可有之也能々心を

付て可致毎日繰返し来る之節ハ毎朝客有之候ハ改へく

よろし心遣肝要也

一 笠ハ竹の子笠桧笠なとの大笠ハ其庭に紐ときなとしてとる

持たる席ハ樹木なとの下り候ハ笠をぬきて通る也

一 冬ハ笠ニて雪雨の時なとの上ハ取せ候なく候ハ路次

但冬ハ長路次抔ハ中の事也

一 雪中之節ハ木の雪を不掃道の雪ハ足跡を付内外の路次り

一 不苑道の雪を取候の中をしき候事ハ猶又見合なるべし

但二月より雪風なとなく候ハ露地の飛石ニ薦を敷

其上ニ雪ハ薦の上ニ積る也薦を敷のみ時薦ハ雪取る

又雪を掃ニ而の飛石ニ座の板床前ニてし

其外ハ足に不湯を入湯ニて雪をけし候ニ而て掃き

置候ハ雪をかくし可然

一　右燈籠台の内ハ塗テも内の道具て有也
但木地之燈籠新敷ナル中ハ塗ヲと不申内乃様也
斗ニ右のけ置也

一　夜会ニハ燈籠の内土器一ツ置下に竹の輪をして曲物ニ
ても土器すへ置ニ候七八分又ハ小五徳の輪の方を
上ニしてもたせ置也かきこミ杯まても柳ニても細く
串をすくれ切揚枝ニ而揚枝ニ似寄横ニして
土器のまへニ横ニ置燈心のさきハ燈ニ寄ハ不入
燈心のさきへハちいさき火鉢し燈に出シハ思こミ燈
籠ニ有之め也

但月夜ニハ燈火うすく明り深く毎しく宵ニハ明く
かし弱くても不苦候燈の大小燈火の太細ニ
より其合燈火のかし長き方空ハ客をも寄
る意也

一　夜会の時ハ燈籠ニ火加減挑灯の火ニて可有之候
但夜会ニハ大事の茶の湯ニて殊外精ク有之候別ニ
羽ニ燈火ハ難き候七つ半より取燈之ぬきるき
ハ無用也

一　大路次ニて道筋も多く待合腰掛数寄屋等も也
ケ有之ハ二三ケ所ニ有る所ニハ青竹をも切て筋道

と嗜さき重物や二ハ外の通ひ通る浦人の者人ハ
主の物数寄なれハ月客の心不足なからさる様に心を
付へし

一 待合の板

但待合ハ竹ハ細竹也竹の竹にてハ細竹
其待合竹の竹をハ何と事を五寸文人候ハ待合板
又ハ細竹也

一 硯蓋の事

但硯蓋ハ物数寄の手前花の図にて入候の竹を入石ハ置
石をすへ竹ものにて候へし其の下に流れ竹也

とそ補物しても好事なるハきれけにて候
筆もし硯箱は外ちいさくハきりけの筆あり
られ候て其文物なる何そも物数寄の次第細人
何事もなしなしそこも置へし

一 細長き硯箱は客に歌人有ハ短冊二三枚入る者有
又は其の書物

一 ちいさき硯箱ハ下ニ短冊入置ニて折紙を置様に
入

一 硯の下には短冊入候ハ置き様にて折紙をとこへ
折紙下ニ懐紙の折様を置て其横にも置様に

薄也思ふの時世上にて来を学んてつけまき方ハ書て
り入たまきとともの次第也

一 たばこ盆並に物数寄の次第
但し火入灰吹うつくしく香炉の様に灰のおし
形ハ三角唯か向けうつくしく宜く風情なるへし
又ハ灰落ハ柳に形様にも若く心をもちゆへし
形様あるへし

一 たばこ入物数寄次第たばこ掃入たばこ入を付て
好む様たばこ掃好まはたばこ入なとにハ一重の数寄たる
ことを好て入

一 煙管ハさしたばこ入並かきハ煙草盆ハ並の
縁に置ゆかけても並

一 灰吹ハ青竹とし外の物用ることあり煙管並ね
又常に用ふしおしかへ也 前日より水を替
物するに並

一 煙管並に客ある入て出しも二本
出ししおき中立前に新しくなるを出す替へし
替あるへし

一 独客の時待合にて巻物並に
但し書置も煙草盆不載

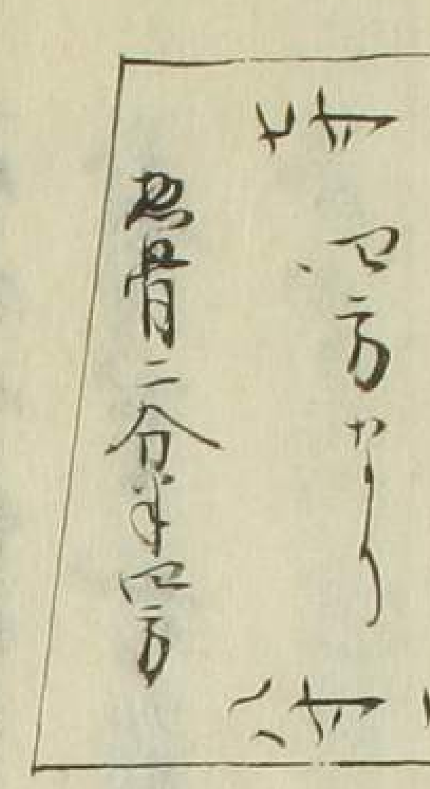
様のうつき出物の類ハ何れも珍しくハ無難
物ハ不及申惣而心を付候事肝要也

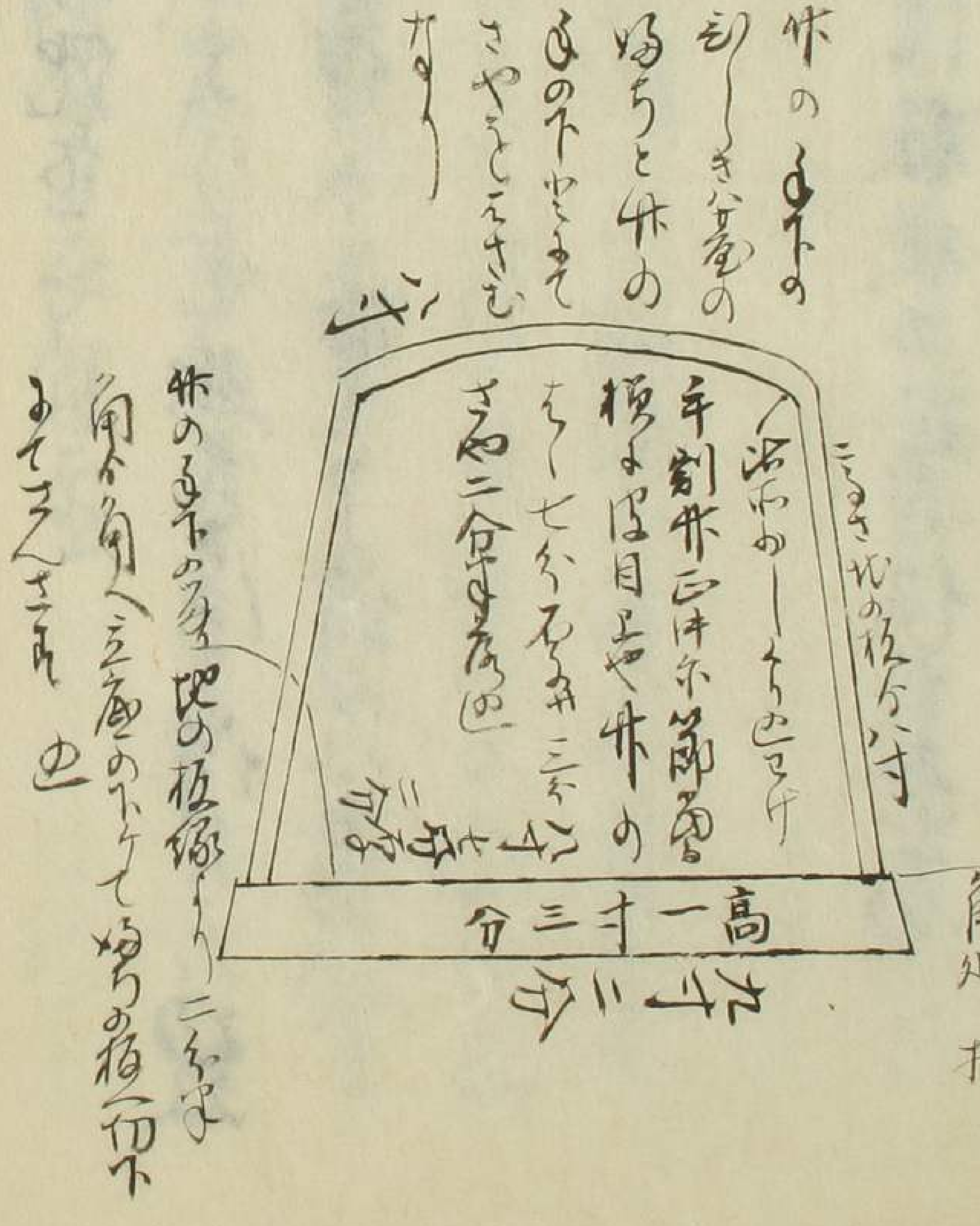
一 正客雑煮出候後別膳ニ出候節ハ侍者ニ宿前
至極ニ候
但是ハ三方并公の儀の時ハ諸家ニ用之無之候人
宿前物数寄候前方ニ而宿へも入一二三
迄のきさを付置也如何ニも正客ニ而盛合
時ハ必用也其外ニハ無用の事也

一 僧の客来時ハ侍者ニ夜雑煮
但夜雑煮ハ色々しく夜物三菜用候又ハ手誠者ハ

一 夜席ニハ侍者行燈
大般若も好又大瓶燈もも好
但侍者行燈般若ニ有然大広き侍者ニハ物数
寄次第見合侍者ニ面燈中行燈好
侍者行燈の寸法板枚の格何も無

一 四方落雁ニて法也

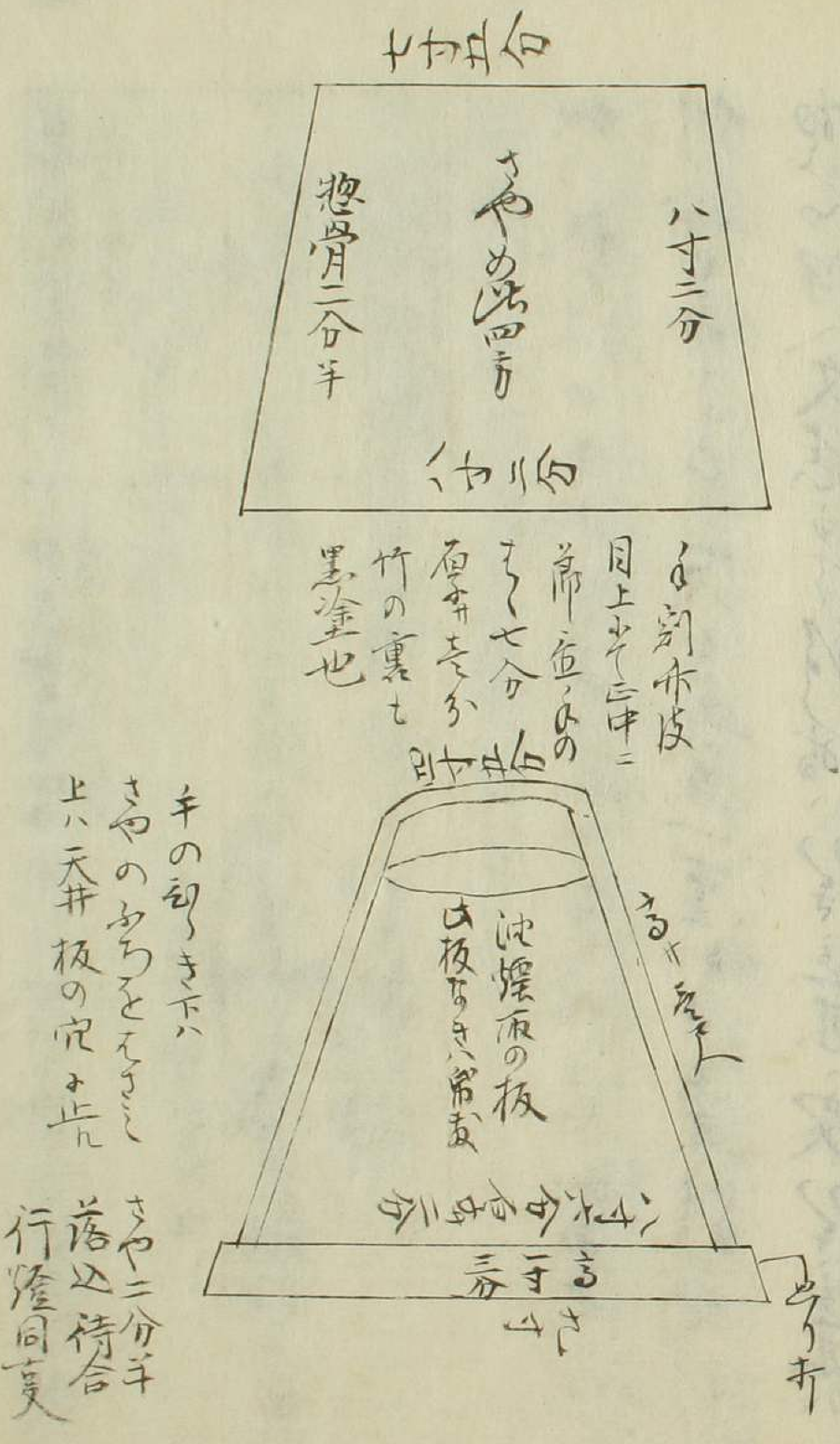




一 明り作りニても又ハ其外ニても高さ二尺七八分也 土器一ツを
燈心添候の大小ニ寄節数也 燈籠
木同然ニ書ハ文段の燈心相書へ候
裾の外廣き侍ハむしろさき行燈ニ而切断すの
次第也

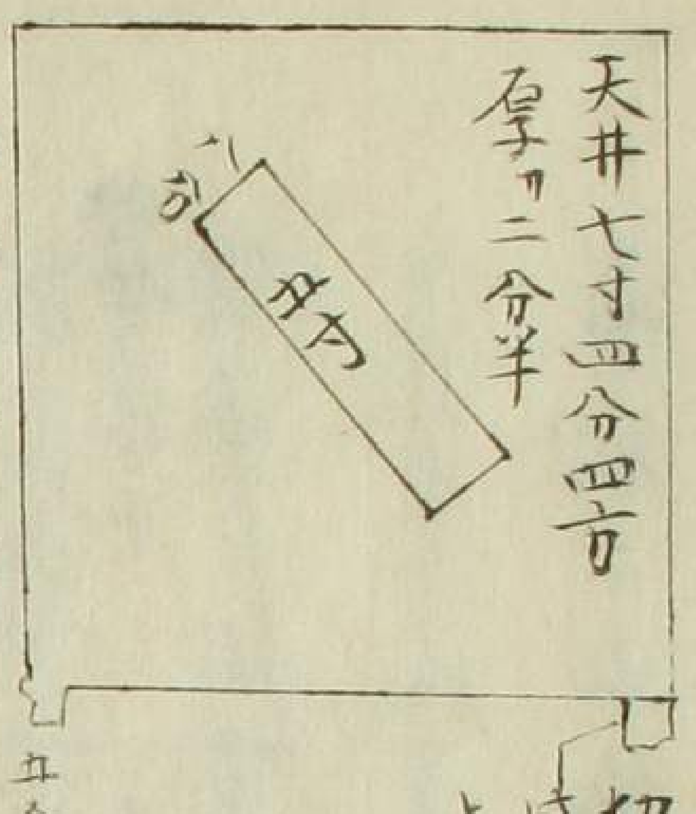
一 夜分ニハ腰組ニ断行燈也
但北懸行燈ハ客の方ニ而海渡を見申
事有之候ハ上京油燈籠の枝有

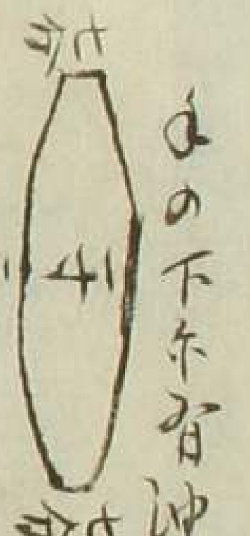
一 此間燈ハ油燈籠の尾根有之[illegible]ニ竹の
手水鉢ニ出候の油燈籠の小枝ニて有之也



一 有来小板之義行燈より宮張を思ふとき
鼻紙を二枚四つ二折り千々折違へ天井とゑ
口の四方ニ入て行燈をまけかゝり候へハ油煙よけよ
能々小板ゟりてしめぎ候ハ宜しからん
淡ハ風帯を取るへし

一 路次行燈の寸法　檜の木之骨基
壱寸天井油煙取黒塗





地の板の下ニ下四重其上ニ茣蓙居りをおかれ候
竹輪を四寸高さ七八分茣蓙一重かき立木沈竃ニ月
物ん押ヘ文法にて錺脇ハかき立木女かき立木ハ
下四分也

一 寒天の時侍従より進り候
但手負ハ物数寄次第侍従より進り候事也但人
亡人病人の客ならしてハ不重也黒田正圓ハ
手負の者ハ添ハ茶の心に深くなりてゐひらく

一 腰掛ニ貴人客の数積候
但腰掛板ハ又ハ竹縁なとの下ニて候
又はくるかのは延なとにあるハ貴人座ハ法用補物を用
貴人座ハなに式や

一 貴人座式ハしるハ腰掛の下座の方ニ候也を座とも
しく重候上座の人より取ておかれ候也上二座之人

なしハ何座の人是ニをも致也
又躙踏の下座の方脇の踏石ニかけ置事も
有之是ハ悪也 其時ハ先客上ニ置也
一 扇子ハ小形なるへし 指渡七寸五分なるへし
一 腰掛ニ煙草盆置にハ不及
但待合ニハ大かた二ツ盆有ル也
一 腰掛ハ待合なき時ハ躙踏の角ニ一重棚を釣 硯
常ニ置 たゝ二盆ハ重ねて扇子二座の上ニ置也
但棚の大サ定なし 二重棚ハ上の棚の大サ縦一尺
此棚ハ待合有ても無之釣てよし

一 中潜ハ之程腰掛より待合より躙踏迄の間ニ有所ハ
始ニ掛よし 腰掛ハ又ハ腰也
一 蔵合ニ於て所ニ見合 他家之戸大小木戸也 此所ニ見合ニ於て
石燈篭大小木燈篭釣燈篭置 腰掛燈篭也見合
燈篭ニ有ましく 方々かきりに迷ひ無て宜候
一 数寄屋の門柵
但数寄屋の門掃除大目中柱の根より待合縁の
ちり芥所ニハ地まかせさる也 掃除ハ一掃除して
又扉の蔭ニ腰の間の上より二所ニ心を付て掃除する
古来也 古風の客ハ扉の蔭腰の間の上とかけそへる

今ハなきものや

一 床に懸物かくる墨蹟絵讃ハ物の数

但無物掛様種々有事面白事ニ而有ます 一

の習也

一 懸物飾ニ並ニ替る事有也先掛物飾置替る

中の続合し見合てよろしきに飾掛物替をおしまず

下に掛先とハ掛物飾りの事かりそめにてたの方の体

を掛先とおハ其とおして下に事無もつとも也 一

のあるそ懸物よしまさりし品能懸かりしは取飾

常にかしこきを和け中の續合して風情のさたを肝要に

直にして露に心を付べし 露とハ風情のさたなる房

之趣意をおしまず乱様にいさ古房来の湯二つの

主張乃心とへかなり

一 客芸人の時ハ懸物の筆者に心を付て好客分

上座にて有物なきや

一 絵讃の絵ハ不飾利休遺の絵を掛候事大たると

並立し被申候ハ有事と心得くふ改まのを

其んて好

一 古人佛神なとの像ハ讃なくとも可賞翫なりしハ不

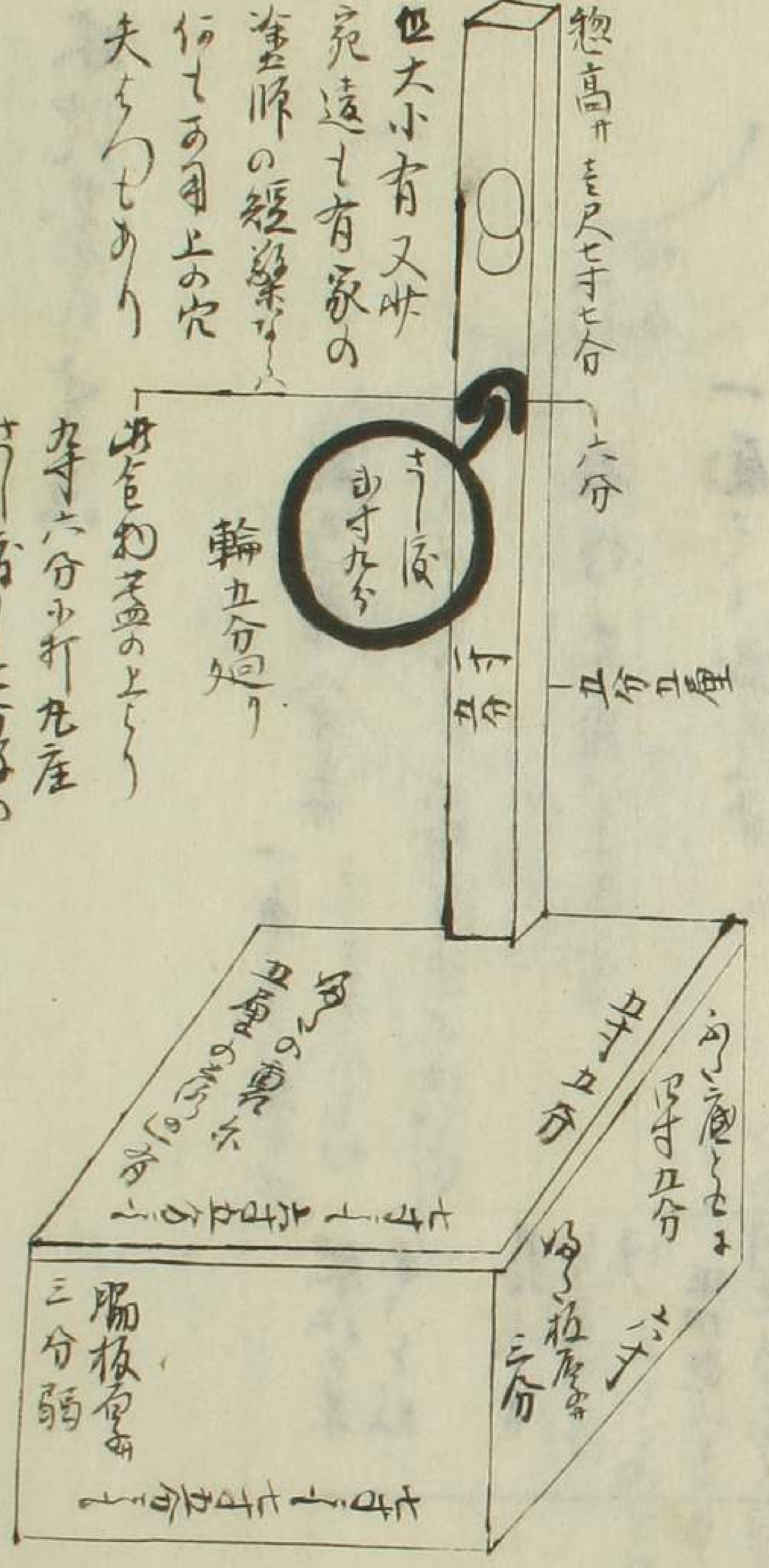
苦候讃有しハ猶好

一 古人祖師の像掛申時ハ卓ニ香を取申事もあり
是ハ佛神と人との不浄を隔申為也 祖師古人の
像を飾申時ハ中立ニ飾花ニ而方宜ク掛なから
花生ハ其日の正客ノ心得ニ而好又卓ニ香をたき
申事中央の案ニ而有
一 飾會之時ハ正客之眼前ニハ大字の物宜敷奉存
ハ花生ニ而かしるへ飾の事有物ニ而好
一 初座ニ花を生掛ニ飾物かくし事もあり 朝白
の花又ハ初座ニハ床目合成体ニ而分取入申様成
時也

一 外題餝あり
一 壷餝ハ可有
一 香の案有
一 盆山の案可有事
但此儀ハ愛ニ略し別ニ記也
一 夜會ニハ初座より石菖鉢を出申事も有 夜咄
會ニハ花とる生り 中立より花の飾りニ床ニ飾る
も有 花見然初座より石菖鉢出し人ハ二ツ手棚の上
に置之間の油煙をとるわなるとも中立後出し可
も宜也

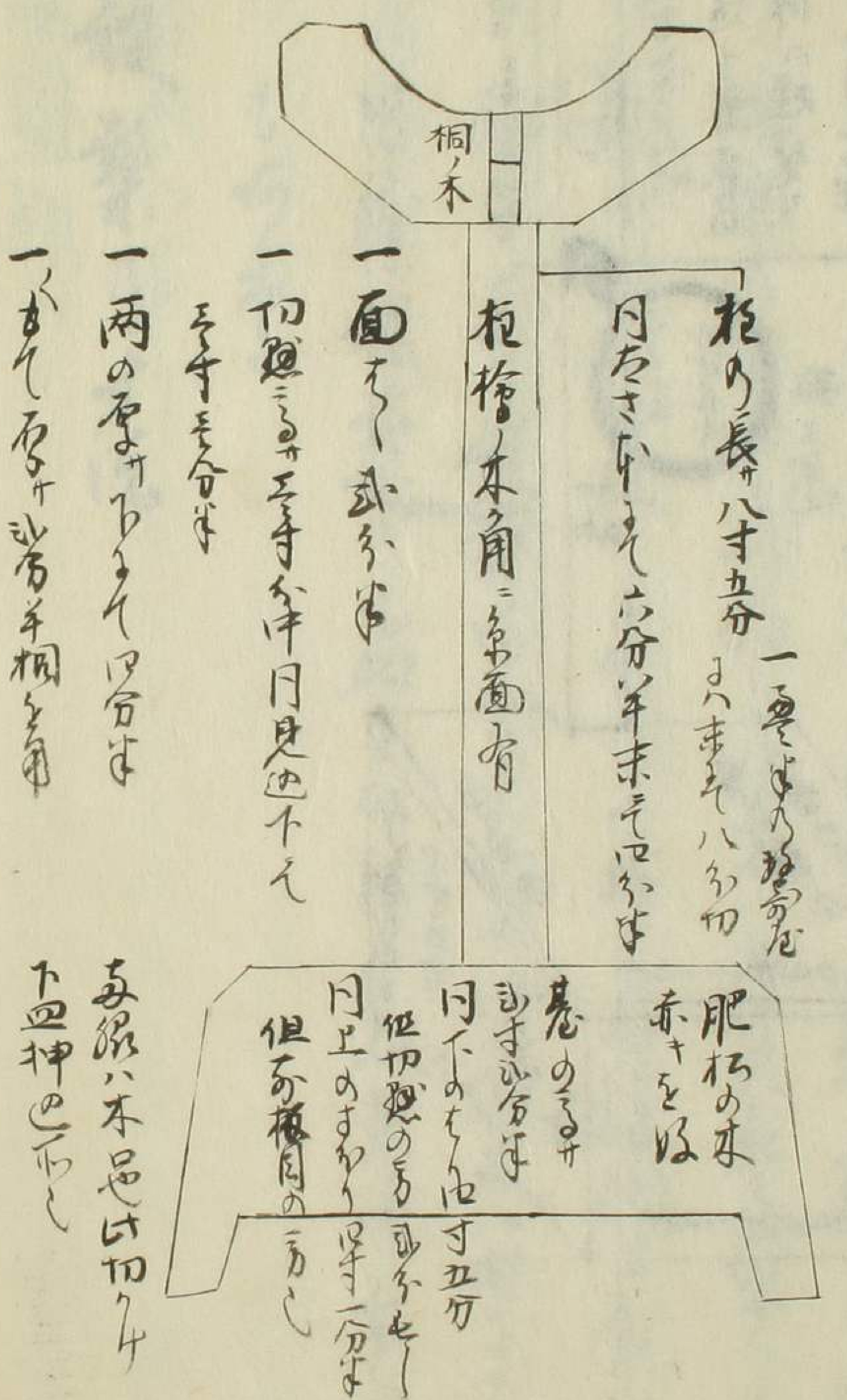
一綖築其外相数寄方行燈立事并但尺八
綖築取退ハかをり行燈ニ而出来也
但綖築燈の丸柄ニ而も有数寄屋立中時分
綖築の立所ハ炉と勝手の間先ハ床奥ヘ立のかたり
床の前柄置て客の立所ニ而構候ニ而無之
勝手ニより綖築ハ其方ニ而も宜事又ハ置き所
昼時ハ綖築の上口をのけて置候所ニ而事
ともかく事

綖築の寸法



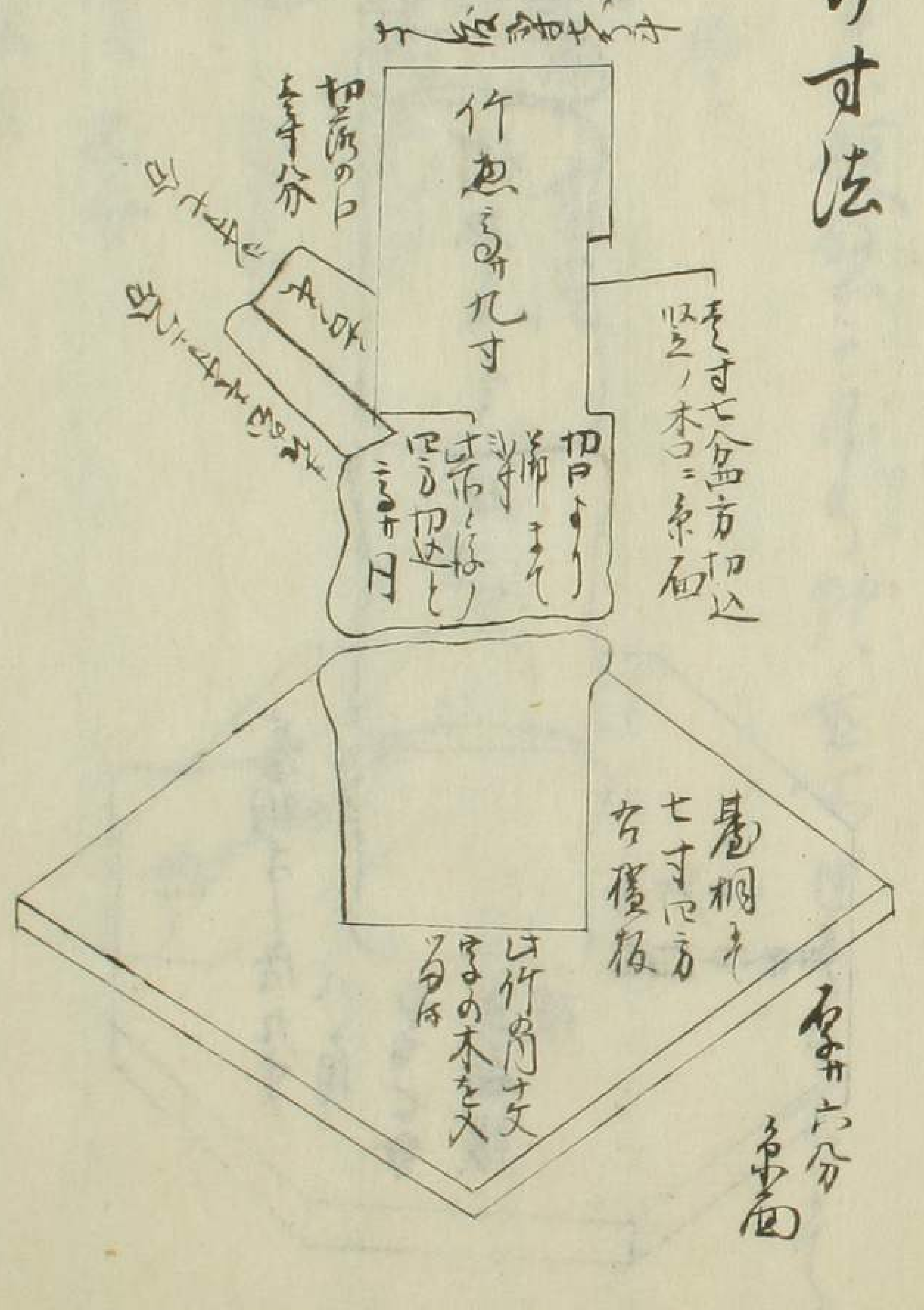
一 数寄屋乃取合ニより木燭台を遣事も有

木燭台の寸法



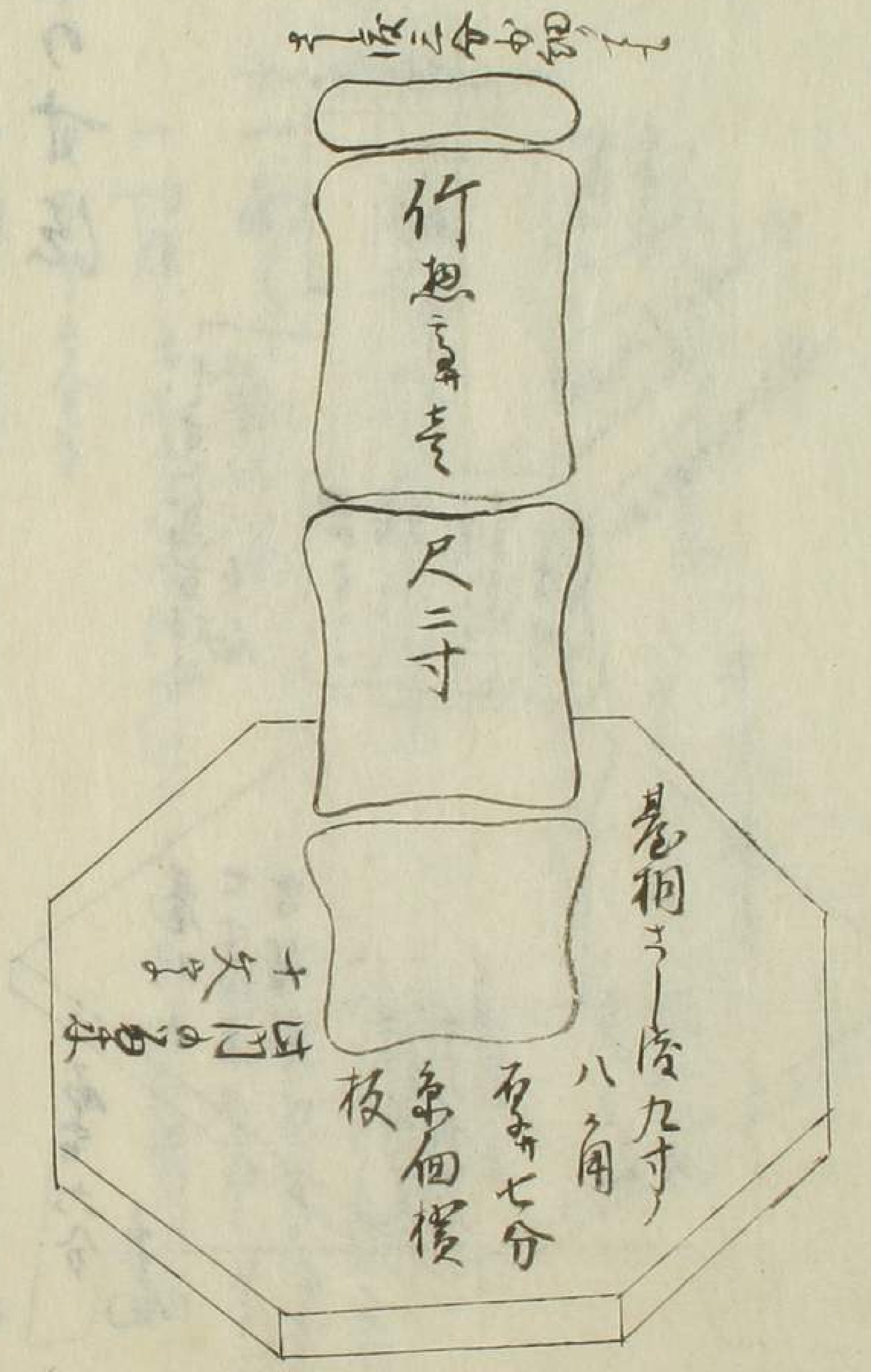
一 数寄屋の取合ニより竹檠を用る事も有

竹檠の寸法



一 数寄屋の取合ニより長燭台を用ル事も有

長備基の寸法



一 殊外せちき数寄屋の内打なとに鎹鐶鎖
有之候へハ鎖鎹之所ニ而ハ難申世ちき所ニ而用
るなり

鎹鐶竜の寸法

一 板の長サ六寸

一 同 巾 壱寸四分

一 同 厚サ 三分

一 面 見表ニ有 壱分

一 穴 上より四分下へ通て明る 四方ニ三分

八分

一 くわんの摩せハ七度

一 同炭迄 八分
右炉縁之外の炭搔ハ首より先角鋸挽ニ志し
なし候

一 風炉の 炭斗 但風炉の炭斗御筆鐶炭の細形ニ致し
首より八分斗ゟ先へ遠ケ寄り来る宗匠
火箸迄ハ唯日数なとの人茶事
扇子で風炉の用ニも炭斗いたし候
是ハ口伝

一

一 大目角の二重棚の上の脇又ハ嫌ふ屏風の角きハに空
焼かけ常ニも水を続し候
但是ハ大形ハ香炉燻宜しかるへき空焼にも香炉ニ是又置
釣合時風炉の間ハ水を続火ハ薫物を焼候事
空焼の有る宗焼ハかも向ひハ別ニ嫌ふ之

一 風炉の時ハ数寄屋道具重子風炉なし候 左様風炉
ある也
但大目向切なとの数寄屋ニハ五風炉なしとも八ハ取合第
加様風炉ハ如此候得ハ畳の上ニ風炉をむしきを打
りきなとして置しハ右宮ものと是又好打りけて置

ともに無事にては拍子座に合ふやう相心得候ハ無事
たの事

一 四五事それも大かた風呂宜しく候得ハ四五事それ／＼
浮風呂にも外しなし兎
又ハ無事なるか風呂数ても無事ハ四五ても事それハ上手
長拍子も無事ハ成候かな風呂の数なき事それハ太
風呂又ハ打かきさる風呂ハ無宜しく四五事ハ書記振舞
同事の心也

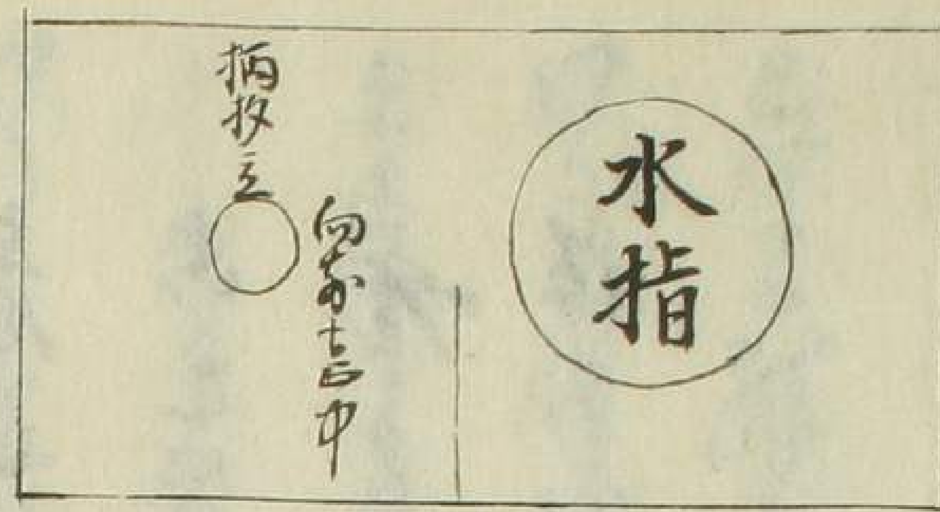
但五風呂ハ甚小拍子かな風呂ハ本地の小拍子四ツ目風呂ハ
九小拍子九風呂ハ四ツ目小拍子も大風呂にては小鼓の小拍子

一 小風呂ハ大鼓の小拍子と小鼓合所も無用に有事也
大拍子小拍子の事ハ無尾を元末とし小鼓の下斗りを長
拍子とし長拍子を二つ合て大拍子とし大拍子と思ひて小拍子
ましし拍子と成る大中小有無尾子長拍子定りなる事も
有之候へ共大鼓乗ハ風呂に用ひ小鼓乗りて二通りに用大鼓を
爲手用りて無用の数を風呂に用ハ仕舞て打しく候然
大鼓の無尾子も拍子ハ容易く乗りハ手を無くの無りハはき
成尾子も拍子ハ客射の方ハ無くの目明ハ手小鼓
つけ候て一五ハ無用ハ待ちの方ハ無くの目にて勝手の方ハ明
次ヶ一ト所おし取り相違有之候へ共究用容易射の事通論て

鎖之の方結明宜く二本鹿子を夜二寸鎖ニ寸鎖とて
有之く二寸鎖ハ水指柄杓立是ハ爐ニ宜く風呂ニ
向しく二寸鎖ハ水指柄杓立蓋置是ハ風呂爐共
宜く鎖ニ茶の湯稽古候具都の義となり三寸
四寸の鎖様く成先ハ三寸鎖上ニ而己四寸鎖ハ水指柄杓
立ニ不知しの間ニ蓋置入る風呂爐共宜くへ尤是ハ土風
し也とか取三寸鎖の代り是ニ申入鎖ニ宜く右ニ寸
四寸の数の間風呂釜ハ格ニ入へ申候
但鹿子ニて茶の湯稽古ニ而武芸の鹿子なとハ
備之節も同事候茶の湯ニハ[illegible]

鹿子茶の湯ハ不苦ニ候先鎖の不明事ゆへ之ニ付
鎖の間ハ及鹿子とて二本結の鹿子ニ巴結縄の
鹿子ハ縄を用ゆ又竹鹿子なとハ巴結縄之候
此事ハ用ひても宜く長柄ニて茶の湯稽古ニ
鹿子ニも両用へく又是鹿子の鎖を略し長
柄のかゝりを寄せ結ひにて心得べし

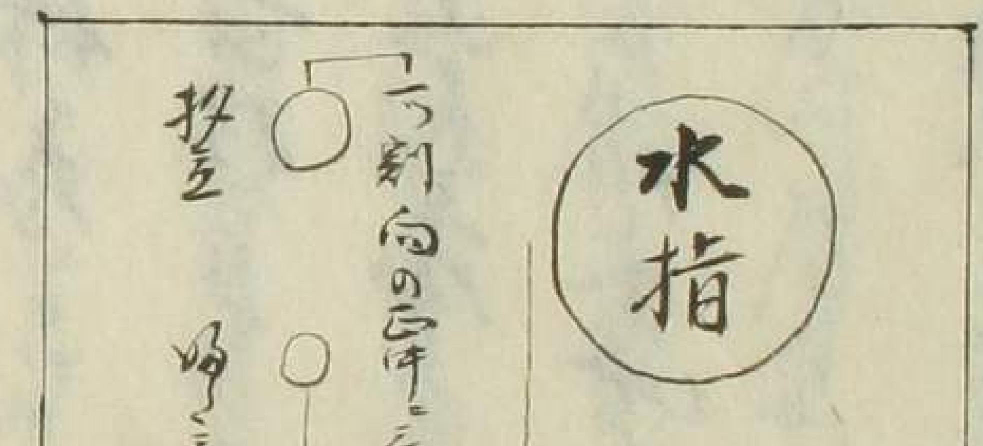
臺長板二ツ飾



此據ハ右の方此端
長板の正中ニ當

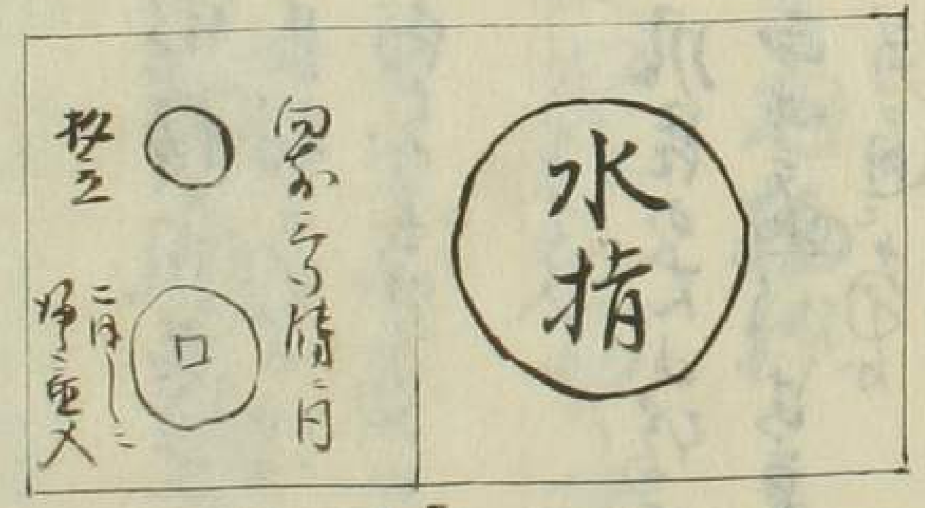
杓立ハ水指の據より右の方に
端と長板の據より二寸置
端より正中ニ置

臺長板二ツ飾



二割茶の正中
此茶のかね目上
ニ置

臺長板四ツ飾

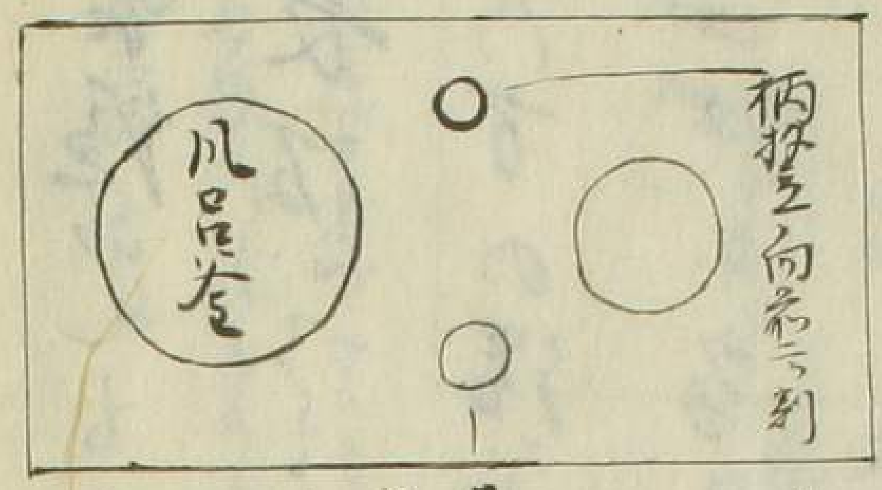


此茶のかね大目

右臺ニても臺子にても
長板にても水指の據
乃方の端を臺子長板の
正中に當る様に置事也
末座正中乃かねをそな
えたる處は右の時は
指ハ表へ出る時は置ハ内乃方に置也袋棚にも
水指表へ出る時ハ二ツ割の正中にて中乃通る位
なき右へすり中ニ成大目の通り置也踊る也

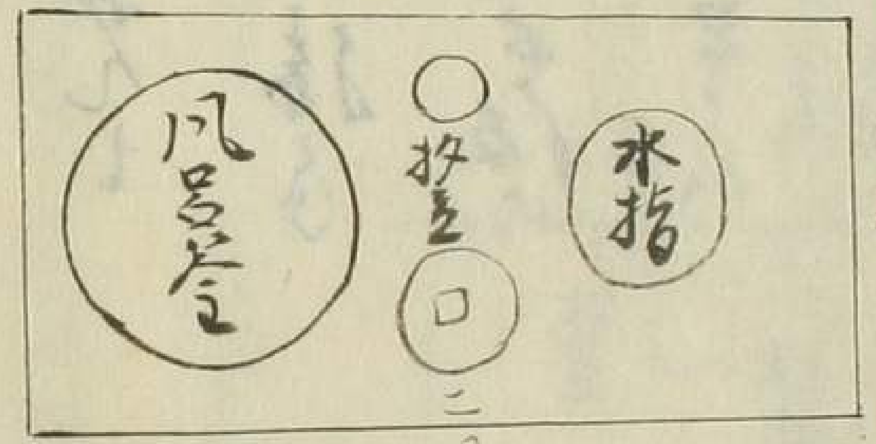
出立ハ古人ハ袋棚出スハ時ニ道具ノ置様ノ常ノ如ク
中ニハ時ニ道具ノ其出シ置中古ヨリ器ナレ
是ハ其前ニ飾ル中棚板藤蔵ノちかひ也
板子ニ置ク事ナリ

一 風炉先板三ツ置



向ノ二中
蓋置向ニ二
ツ割前の二中

風炉先板四ツ置



二ツ割ニ蓋置入

水指ハ風炉の左の端と長板の左の端との二中
向ふも中に
風炉の左の端長板の二中通り置様ハ前の
前通ニ置也

一 古風炉ニ長板二ツ置ならしくハ
かな風炉水指ハ青磁染付かなの物杓柄立も同事
茶入蓋置も同事青磁の揃へかなの物の揃染付の
揃それも蓋も板ハ宜しく揃それも不苦文かなの物も
ても茶碗だき桶ハなりぬハ古し杓柄立合ふしも水
指ハ其の手桶あき置也

一 大板寸法長サ九寸三分巾一尺四寸又長九寸四分巾
是ハ手の敷もやしれ候ナれハ不知ニハ先きのうち不苦候
惣其ハ濃は中なりとへハ前へ出してハ何しく諸ニ付
柱有所ハ前へ出して中柱の前と小板の前と揃へ様也

一 風炉ニても小板ニても向の水指の飾付同事なり
向へ寄る事ハ無之候一尺程置て水指左之脇ニ置ても候
しくれ向の飾付より前へ眉中の眉二ツ割の正中
又ハ三ツ割の節を小板の正中ニ置候時ハ三ツ割の
割節を中ニ置候又眉真置候て釣合の写ニ縁の
置合ニて向より前へ間中ニ三ツ割の節前の方を小板
の前ニ揃候之ハ前へ出して不苦候時ハ揃へしの置
有風炉ニて半の事替也

一 小板の上ニ風炉を置
但小板の上ニ風炉置候時ハ三ツの足を揃へ可然

団扇ニ置候てハ遠く候事ニ候事唯風炉ニ釜の釣合
小板の正中へ寄り候様ニ置候てハ宜く

一 風炉ニ五徳入候ハ小板ニも五徳ニも置所外ニ七所の記
三ツ有事有写ニ有左ニ記之右実也
但先小板置事ハ無之

一 風炉の左をおし前へ出し客付を揃る 其一

一 左の五徳の上の当り五徳の足三分一同入 其二

一 右の五徳上の当り五徳の足前の角 其三

一 左の方さ上かし先へ流し 其四

一 右の方き上左よりおし前へ出て流し 五

一 五徳ノ爪向の目ニ而一分ニ而し候事甚六

一 五徳の爪向一分ニ而き所一分先へよる甚七

右七所ノ習ハこの事専要ニハ切合候ナル事を
よく知るへしとて好ノ所改め候

一 風呂の五徳ハ前ニ成候ニ而の足ノ前ニ輪を打 かまへ
しかし前前ハ其上ニ候得ともし而や但ノ五徳も輪ノ
事ニ成申候

一 但長爪の五徳ハ雲龍釜ニ而きわしム手前ニハ長爪の
五徳好ミ申候と申ハ其上ニハ別好候ならハ小雲龍なと
とかきりハ茶ノ湯ノ道ニも雲龍ヲ用ル候事甚敷

ハ遠州公物数寄ニ而笛の釜とて有り是ハ雲龍ノ代リ也
ニ笛釜風呂とて風呂ニ共ニ然るニ小雲龍も事
ニ依而其上ニ而手前ニハ源也し頭の五徳をしへ候
迄ニ而ハ掃しニ而南流ニすなわちしん也さる事ナける
爪を好しム又五徳ノ輪を打つきし事不切之成
者ハ五徳をくこましム かき有事ニ而切前なる
前ニ而者ニ而好ミの捌きハより打つき申候

一 風呂ノ灰いろし様
但し形ねわいろの灰申候宗旦源へ申伝候手前ハ
古き灰を好ミ相別ニ而まとへる好く手前ハ灰の前ノ

土手厚く少し取古灰よし 此方ハ前乃土ハ上清まて
好ミ取形おハ精くして宜て平打合仕付るハ池田
炭の為し前之れ是をそ爲て無差候ハ精しくてよ
ろしく候

一 前土器を立て灰を残し猶土手を覆灰をとうる前し置ハ
ハ央入れて一灰撥て落しおもうかなをよ残しおれ
口清有

一 前土器をし淡ハ手二ツ斗宜ておの遠ク手二寸五の数
寄次第し土器の深きハ深し浅きハ浅き方よろし
くハ割り中付く

土器の底前先の方之
一灰寄りハ合重ねして其のこ
まりめ入くて下の切ハ土器の
数大きサ四ツ一下を切る

（灰寄り上の 略ス方六七 分ニすへく）

但土器の底よくすりを付中宜く灰の前をそ残し
中時くすりハいきハ悪しく見へしかなしても宜
みえくすり乃前を是ちあくねるともよし 尤黒キハ吉からす

一 灰寄りのこまり目入れ筆細くハ宜有 切れよハ不好候
ものへハ消し取出なしく候

一 寿星土八二枚土器よりて土器二枚を置よし口傳別よ

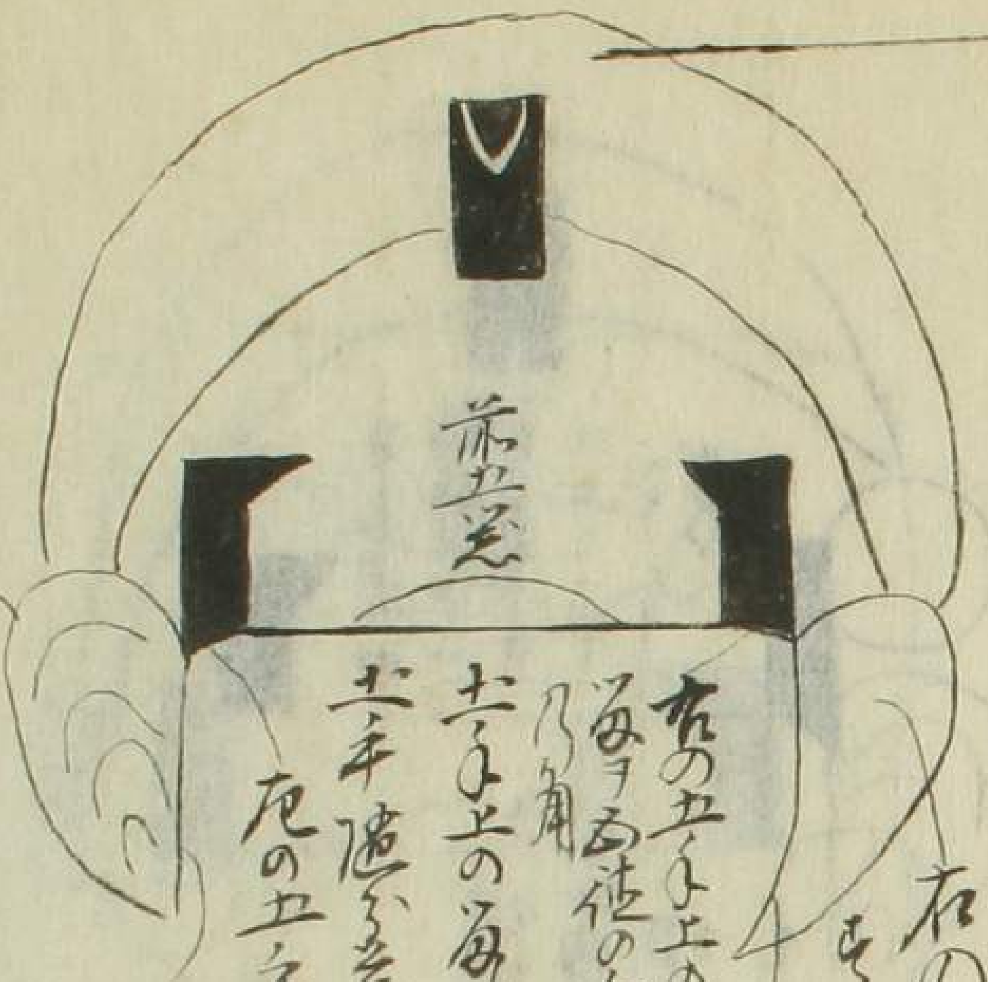
諸色土器の模様も有又其の通りをかしう言ふくして
ものも昔ハ
一 炭気をさり土器をハ土器を上手中にて切くゑ下を上を
手際にし是まても常の通りをおもきく言て言葉手にし
言うけハ土手をたらしもきく八土手もおきく又さり土器の
気を強事にて風呂初りハ風事ふ何し風呂
初乃炭気ハ常の通りよかし置きくする事とさり土器
風呂の名残の炭気の時かうり火気を出し様とふ器
様ものハ人体や
一 風呂炭の仕様数多有と様より人も有ま人も多く有ハ
何し炭ふ炭二色ほど有は炭ほど風呂ハ八ふ炭る如くし遠山乃
炭ほど斗や遠山よなりて八種く有ると人も山の数山
乃姿霧ほど斗にもあり霧ほどても遠山の炭ハ遠山一色
に火間なし風呂乃炭ハかき上げたん常の如く様
同事ふ土器も在て起るふ土器ハ火間有炊きも
火当とハ風呂の口の事や此口なき風呂を火間無風呂
とかれ千家に桶風呂とかれ桶の様ハ数地とをふれ
都りて茶の湯ろ数ふなし
一 起る風呂にても強くして炭ふ様様付け事へ
元来炭気の事の事ふ火気を金山らに沸し中事也

一すん並の尤ねむりうんハ山宰ふ可被諸流接拒を
待もの部ニ涼事ハ紙ハ丈瓶口方今の灰ハ遠ふ
塚黒風呂ハめ常すも灰ハ谷まより出風呂ふ
書郎しハ大事ハ余もりく倉を五一乃外め郭すも接芸扇掛ル
よ篇はたくうれうろく細書ニ方人冝てよきくわれん

一
九牛寄治而尤蓋掃増ハ老れ尤一先畢竟口傳なして
ハ難知而事く有之

志乃灰の分
他向の灰め高して上の箇りきう所く肉並有之冝て

紫おしきし両振添すき亦乞きし肉並有て振ふして
灰うきえこうりふし振ニいるす



右のうき上たより共しはく灰ふ脂なし
きうしと被ル

此角の下ね肉老め此ね乃肉の下の添ニ
いつれ是ハまうて灰すく乙也乳乳あ事

右の五手上の
為ヲ両徒のか
乃角

六手上の両並亦て細ク灰一並ニ灰按ニいた

六年徳ふ層く寄てなきたる按紙 何も依まき三按

左の五年上の筒り五徳の爪二分一入て

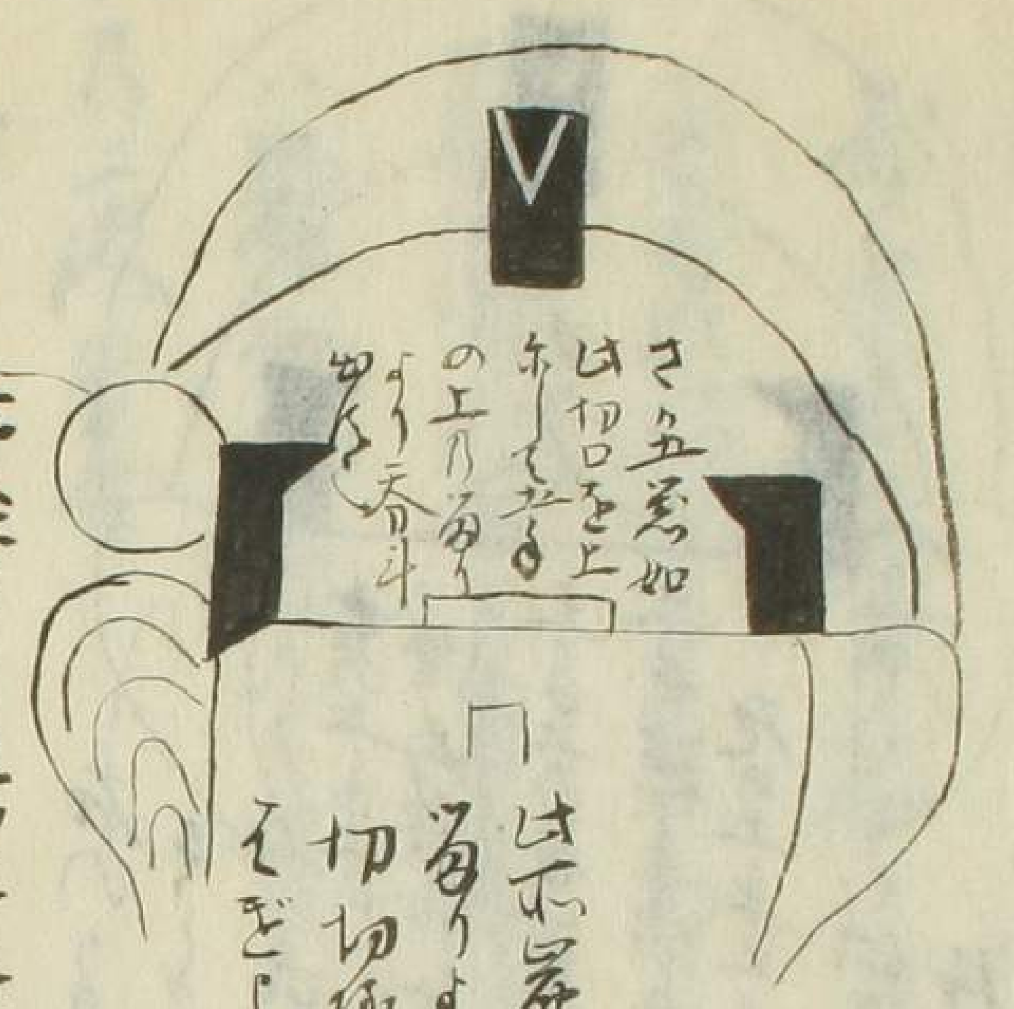
此角おし下刮り紀高すしとそ白しれ

按二一灰とうき立按ル

左のかき上表よりかし涼く灰ふ脂こ如斜て按ニ

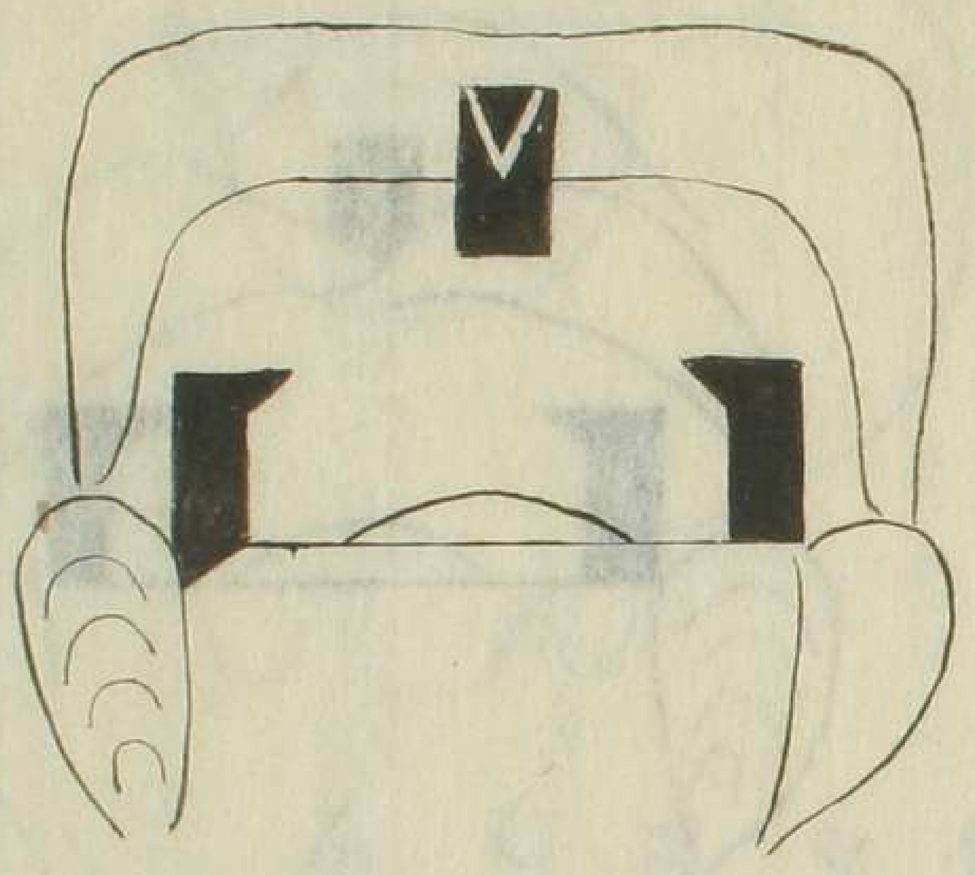
志乃灰又一形

但さゝ土器乃立様并ニ尾敷ニ前ニ前土器をぐ尺ゟ
あ土器ハ少し斗常の土器ゟ
立器二枚土器をもけて用申之



此ハ尾ハ少しハ前ニ出たりしや土の上の
前りすり二分斗立て小の一灰す合え程
切り様ハ借切くちをかくこしるハ出ル
そぎしゟ西背風呂ハ少しふり具候事
一灰たまり尾の中ハ出ても能き方ニ出て小山一つ
能とも志の灰之此小山ニかりふれ肉立つるよし

四方釜乃灰



出ル前向の灰朋張の形状の
形のことく四方に欲候之
角なる事ハ何も候

但風呂ハ四方也ハ一灰ハ丸く放り四方釜の灰の出ル灰ハ
釜ニまる風呂ニより少し之宿を釜へ津候ぬけれハ之

遠山乃灰

但向を山ニ作る山数三ツ五ツ七ツ様使主の物数也

深サ浅サ合せ之之山形を作

形状ハ四しく内ニ真を揃や切さき

立使ふ治き

此遠山天気より備へ置べき

口伝

前土器よりし事常の通り

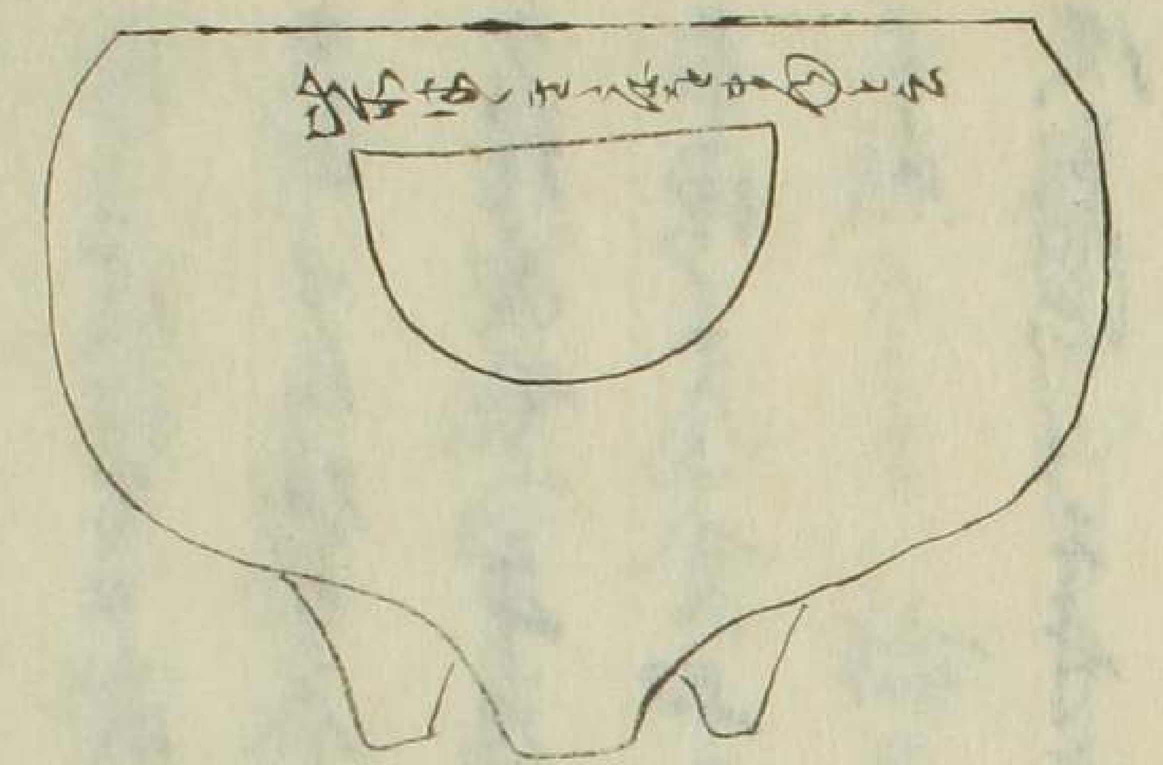
又ハ深目ほうとし事も

皆口伝

又曲乃えらし常ニ治たる

ゐるしかし

眉皆風呂



但かな風呂ニ皆土風呂ニも

あさ来風呂なとニ有

眉ある風呂ハ前土器を

もぐさし まるく同様ニ成

成る也

一 鑪に五徳入様

但鑪のすミつの内を五段 灰を入るゝも 灰高く入候て 灰仕替申時も 一段にかきりなして 同しく

ふ色〻にて錺を入 五徳を入て 輪台下まて 常灰又少経数を入 年尾を入申候 其りを上向中もく故

申候ふ入申候 土 其より〻ふも 自分灰 それかる目り

申候

一 灰を濾し 其手前入 五徳を入申候時 何程も其へ有之候 五徳の輪を鑪の右の際に はき申候 向物

候 夫ハ前の壁に輪をはき付申候 灰を入 五徳の輪かくれ申候ハゝ 此間より放し申候 五徳の輪大形ハ はき付候に

の壁をおしくろして入る事も有之候

一 五徳の高サハ 輪口より敷石の釜ハ釜の口鑪ふちの上

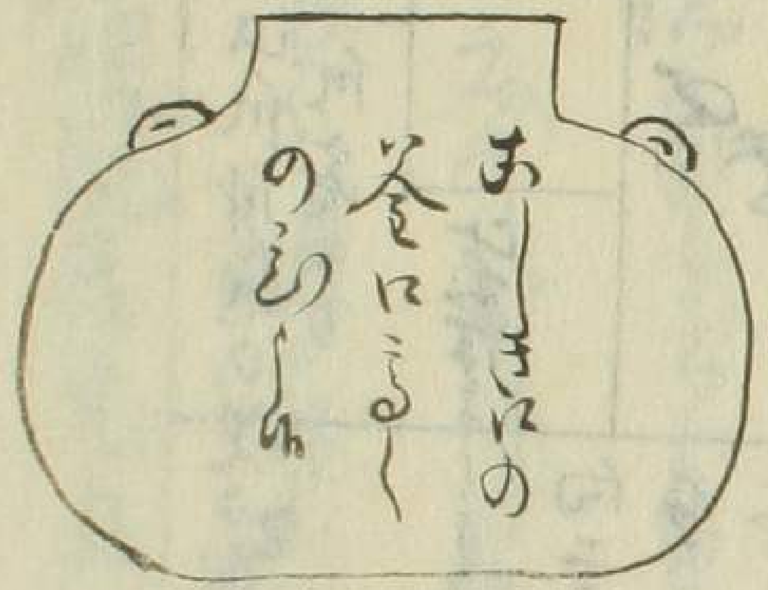
ねらり三分高く入申候 是ハ土釜の時 柄杓釜をかけ申時 かしを用へ候 但大段の下を釜の高

の口より 柄ハ重て中ニ 時 鑪ふちと柄杓の柄との間(アイダ)三分明け申候 柄杓に候て 五徳ニ有之候 又焼口の口も〻 口

高く 釜の口ニこしき候ハ 釜を鑪縁の上箱

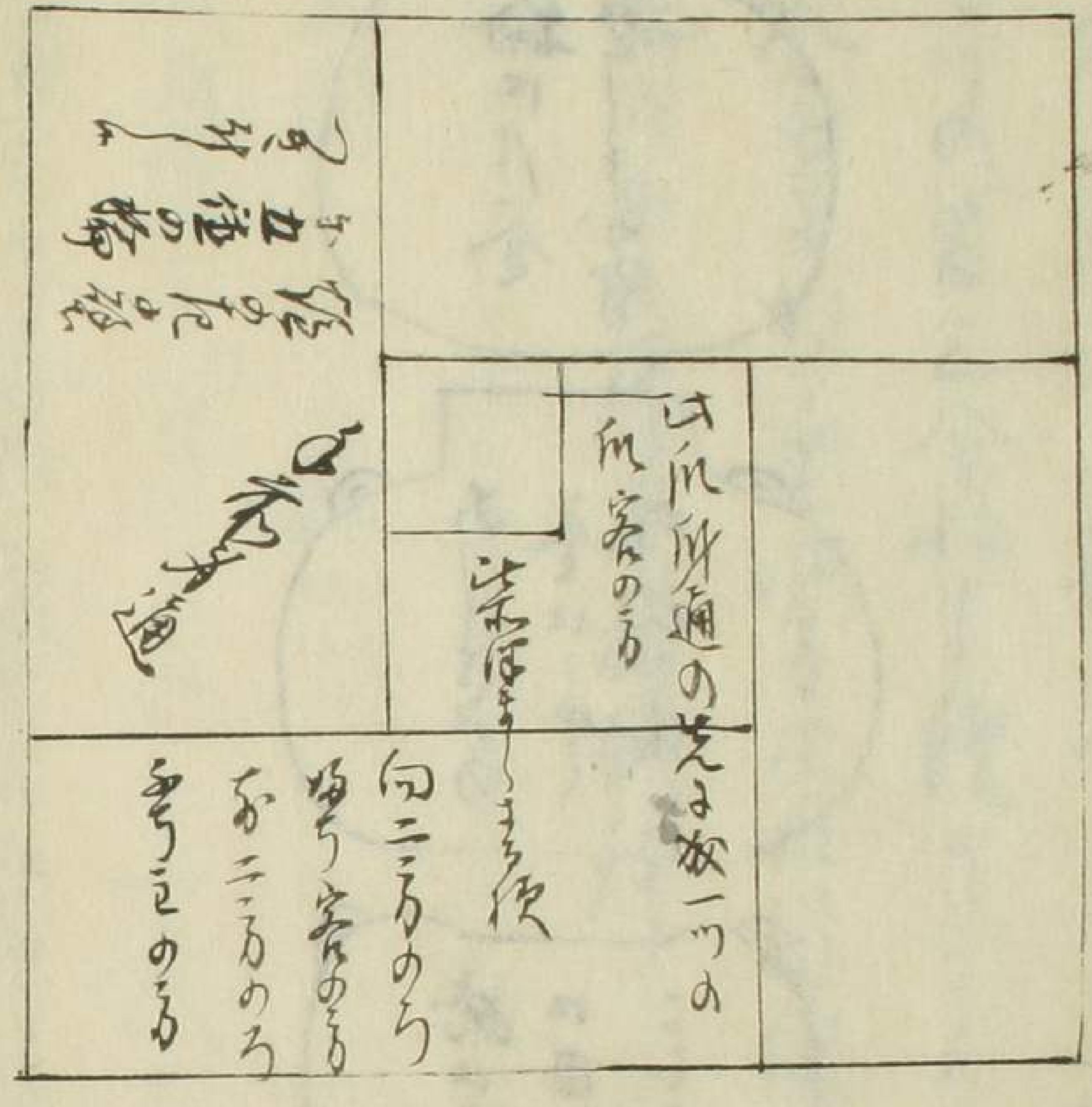
より三分下けて 五徳入申候 是ハ土釜の時 柄杓釜に

掛ケにかしを同へ差添まはかしの先の方を釜の
前の口にかけ柄ハ身ニ添ひ肘錠縁と柄扱の柄
との間三分明ケ候かしして五段居申也何も
釜ニよりかけ置申候間見候ニ見合候へし 五徳の
輪の下の所ヲも加減可致 ーー口伝

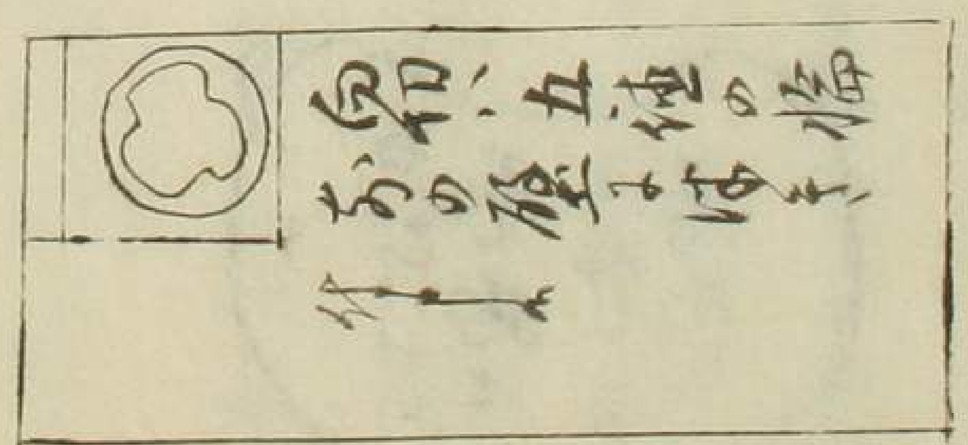


四畳半五徳入様

但大月より是ハ用し



風炉ハ[illegible]



一 釣釜ハ正月より四五月まて五徳なし 古時ハ宗旦家乃釜

並をかけ申し候 宗旦家とハ五徳の釜並を

但流家より宗旦家の釜並 遠て古有三河人形乃

釜並を宗旦家と云ても有り 又桐の釜並を掛ける

事あり 是を宗旦家と云なし 宗旦家ハ古有五

徳の釜並を宗旦家と[illegible]

一 遠来の時釣風炉も五徳なし 古は宗旦家を用

ひてよし

一 炉の火の仕様

但炉の火ハ炉の古き形古法ハ炭多くして重ね

かし混しこハ各々一人ニ付一匣ツヽ鏡絶くり

一 何れも匣まても宜て然る後何しき一匣ニ鏡く半ゆ
しきにハ何しき一匣大中小ニ而いくつも一匣ニ多く入ませて
鏡く大〇中〇小〇 此大ナルもく宜て匣ゆるひうえ

一 ふるひ合ませく差しに

一 何しき一匣とハ今様京数匣とわして壹ッハ大ニ何しく
にて数匣とハ常ハ今仕立し鏡中ホ二ッを匣と
く思く鏡かくもりしに一匣をそつきてハ匣ニ入哉
度ともなく鏡かへしにハ年を經てハ錆の外

一 かくし嫁そつきてもそてけきハ作り嫁しに其ハ匣を
折くたき匣鏡をひよかけく大中小をわけしに極古
き古き鏡の匣をとりすき器物ニ入てく古鏡何しき匣を
壹めし二ッを器物ニ入て四すりてハ古き匣二ッを匣ニ
而後衣をりもとる極ニして差ひしに出来ハ古き数
壹人ならてハ何しき匣ハ不出来誠り

一 必古き匣何しき匣も差ひしまゝハ是叶半ともなく
新数ゆるき一匣斗ニてハ不出来に

一 箱匣のたしなミ土用ニ用紅粉箱ニ箱ホの浣汁と
云ものも有るもの數年も匣を混しかゝらもしに

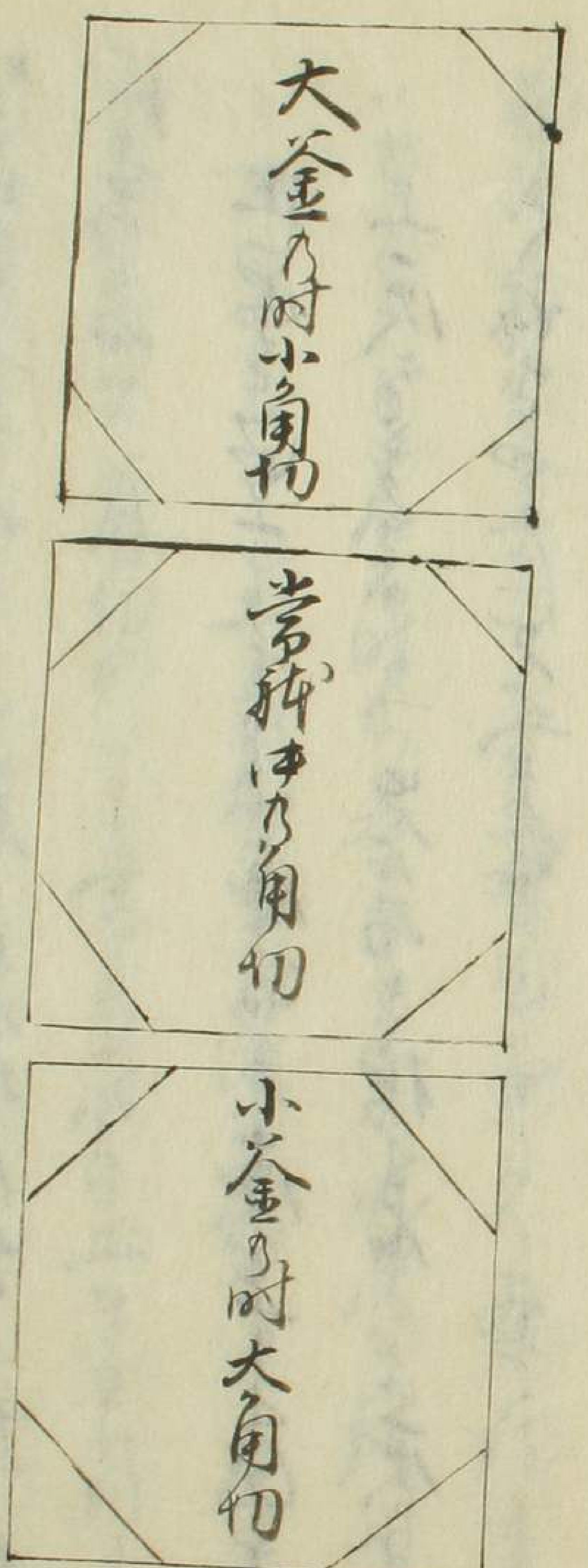
或ハ又人ハ灰かし工夫有加く然共古実ニ古き
灰なくてハ冬さめしく見ゆる様にし又ハ灰かしハ
宜からん今此ニ記す灰を水にしてきびしく
灰の仕様の味を不知故ニ一灰の内ニ茶湯骨舎利
の様に成大にかしりとも古実ニ古き灰ハまし候ニ之
法也言き灰ニ御座候ハ其上音ニも宜事ニ候

一 爐の灰角切ニ事ハ釜の大小ニ寄りて大なるハ角を
かし切ニ小ならハ角を大ニ切して大ニ切ニ事も八
角之円ニ少しもあり不用なり角切ニ方よく成ニ事
大きに違ふてかし切ニ事も様子ニ而何もかしの也

打出ニ様の角切の様に候ハなくて又ハ何も見しかるへし

灰乃図

但大中小の角切見合ニ可有之



一 灰の角切ニ事四方とも古ハ相違同様ニ而切候分
五徳の爪向之方ニ二方ニ角を引く爪を入る也

也一灰内重有る上ハむつかしき事ハ甚秘口伝有り角切
の上の再ひ一灰起して置事故程よく致候て又
押え様ニより事何しく思ふ事ハ何様角有て危き様に
致事也
但灰を仕上して後座敷の座をすへて見て
上灰をうきならハ先ハ危き様に致して灰へつきて
くゆきやうに見へ申也
一 灰の涼浅極て危き炉中深く火を近く見るへし
嘆気ぶりハ座中に深く火を遠く見る心得もあるへし
持やるにてハ何しも見へし

一 聞の香ニ付て炷の灰押之事口伝有聞ニて
つの火を押しても持出へ灰をこのミ上重押捻合見合
角切なし
一 香の炉かき上とハ変有之候香の香炉事之
ハなし但若香時の香の気成に一灰を致聞之
ろへハかき上重し立きまをとるし中をきし灰を立ち
方へかき上て角切めし常の一灰の立きる不同し聞
も同様ニかき上ても是も危き心得へし
但何も立き候て一段押なして相しぬたき月の立見
預かるへし

一 蝋色ハ十月頃より十二月晦日之塗物也 黒塗志
塗又ハ是の如く合物等か并梨子地蒔絵合ハ大
形かき合の方ヘ置て重ねて置て地金押箔成
物等かきの外唐縁短縁等ニ青塗すへき候
但青塗の本地ハ檜かき合の本地ハ栗也 其外ハ
栗の物也

一 洗ニハ洗縁と言事あり 栗の木地塗也 是ハ本
地をうけて蒔を成ハ洗蒔ニも洗縁有 梨子の本
梨地を木口切ニして切て千重其木口にて古物にて塗成
らを掛洗ハ物数成にも栗より外の木ニてハ成不申

丈夫栗の縁を洗縁と申候

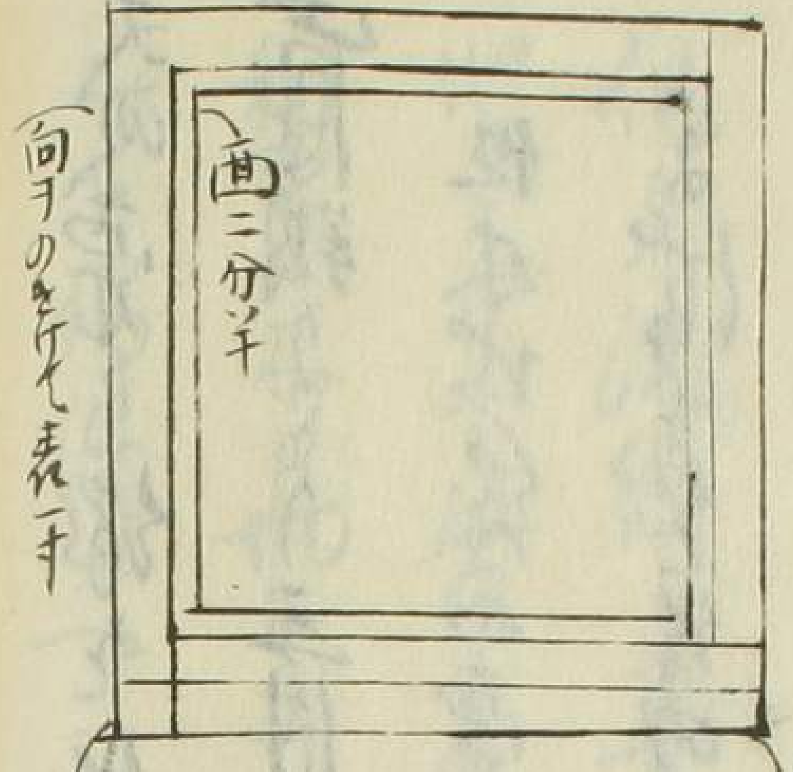
一 二月頃より三月晦日之ハ本地縁也
但本地縁ハ栗也 又ハ桜の柾目 又ハ桐の類 又ハ松
ニ漆を付め人の好にて波目を編て其両の波目も
是に合ひ候てあ成 四方の角を波合ハ波目
なくすにて違置て遠合遠合ニて能縁の景気
是ハ鉢の形なりと成 又右の内ニハ栗の板也
又絵塗成 蒔絵の類 又ハ金紀縁の類 金紀縁ニハ唐子等数
又ハ黒柿杢木かよの類也と申候

一 蝋色ハ卯月頃の風呂より取入して六月

朔日ゟ三月節供迄ハ風呂ニ而、夫より九月節供迄
釜をかけ候、右の通り冷なる時ハ一生の間静なり
半年之内ハ急ニ事を云ふ也、宜しく皆時も出ありし
鉢をかけ候

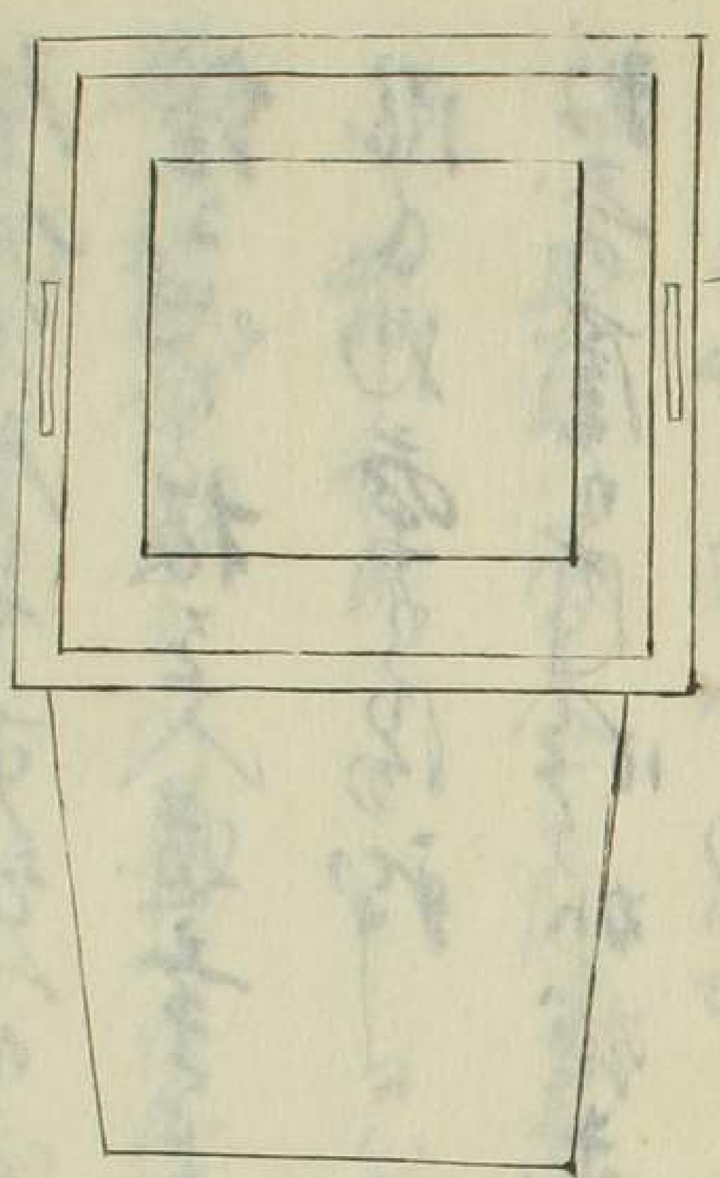
爐縁の寸法

但シ京都ニ而者爐縁ハ大坂ニ而合候也



大抵ニ京都ニ而爐内の巾一尺二分落し定候
裏の方ハ巾を一分狭く致
木者ハ寸法合せ
外法者人尺寸四分
二寸二分弱
田し弱めなるよし
是ハつまりまきて
炬燵寸法なる

すむ川の寸法



炬燵ハ赤き色ニ而あり
色薄く赤き色のふ
色ニ而色淡きも宜
色を付く赤き色なる
大かたしく

一石炬ハから志ん又ハ鉄前石かハ川石細工ハ京都ニ而
中付ねすむ川の通ニ而炬ちを付炬壇を一段お

掛し申候ハ、鉢物ニ合申候 石鉢ハ左右ニ置候

一 銅鉢ハ土ニて下を塗上ヶ寄せ候物ニ台座ハなく候
常ニも左右ニ掛ヶ候

一 尾鉢ハ尾を すゑへの通り焼申候 其ニも左右ニ掛候

一 鉢ニ地ヶ板を入 道幸をも切入候 其ニも左右ニ掛し候も
勝手ニ物棗の湯[illegible]ハ 弁ひの鉢ニ候

一 数寄屋の内明り加減専一の事
但明りつよきハ陽気ニて何しく共し 少なき方陰気
ニて宜く 中立後ハ明り多き事ニ而 昔ハ陰気ニて
らき宜く

数寄屋の内明り加減口伝事ニ候 つき上の窓
上下窓上ハ上下も二ツ宛ニ有之事ニ候 但二ツの窓
上下ハ数寄の時つき上より沖[illegible]を積候 窓上弁
其外ハ[illegible]の内二三帖より[illegible]を付置候
事ニ候

一 数寄屋の内明りの加減ハ 台所ニ而細屋ニハすき
事に候べし
但いよすくれ又ハ手前細くしの事すくれ宜く 台所
ともすくれの手前 台所の明り加減ニかけ
其ハ外の明り加減ニ付申候 障子ニ付りんすくれ

なき時ハあしく候まゝよく見合可有

一 障子二枚有時ハ切より出て風の内一枚ハ障子一枚ハ暗くして蔭を取時加減次第見合也

但障戸ハ枚にしての袖棲打也

一 暗気強くハ二枚なから障子也

一 風呂の内ハ暑さ強き時ハ二枚の障子を立候ハ悪しく一枚宛やはり立て見合也

一 寒暑ニハ障子を立て二枚ともに立ても中に立置ハ暑の折もより冷気強時ハ見合て又冷の冷気の事を考へハすきまの内湯気ニ事有見合て遠き能く候時

但数寄屋の内にて湯の道にて寒き時ハ陽気暖気ニなし小座敷の気詰り中なから数寄屋の物好きによりて其心得可有之也

一 寒天ハ初座にハ不上物也炭を入て湯を沸しても中立後ハなり初座に湯き上けハ炭を入て油煙を出し易き文ほど加減して合是迄共にしはき上也

但万一七時分客来て中立後炭を入る時ハ初座ニ客を物に花をいけて其上にて中立後の気味ニして中立後炭を申候

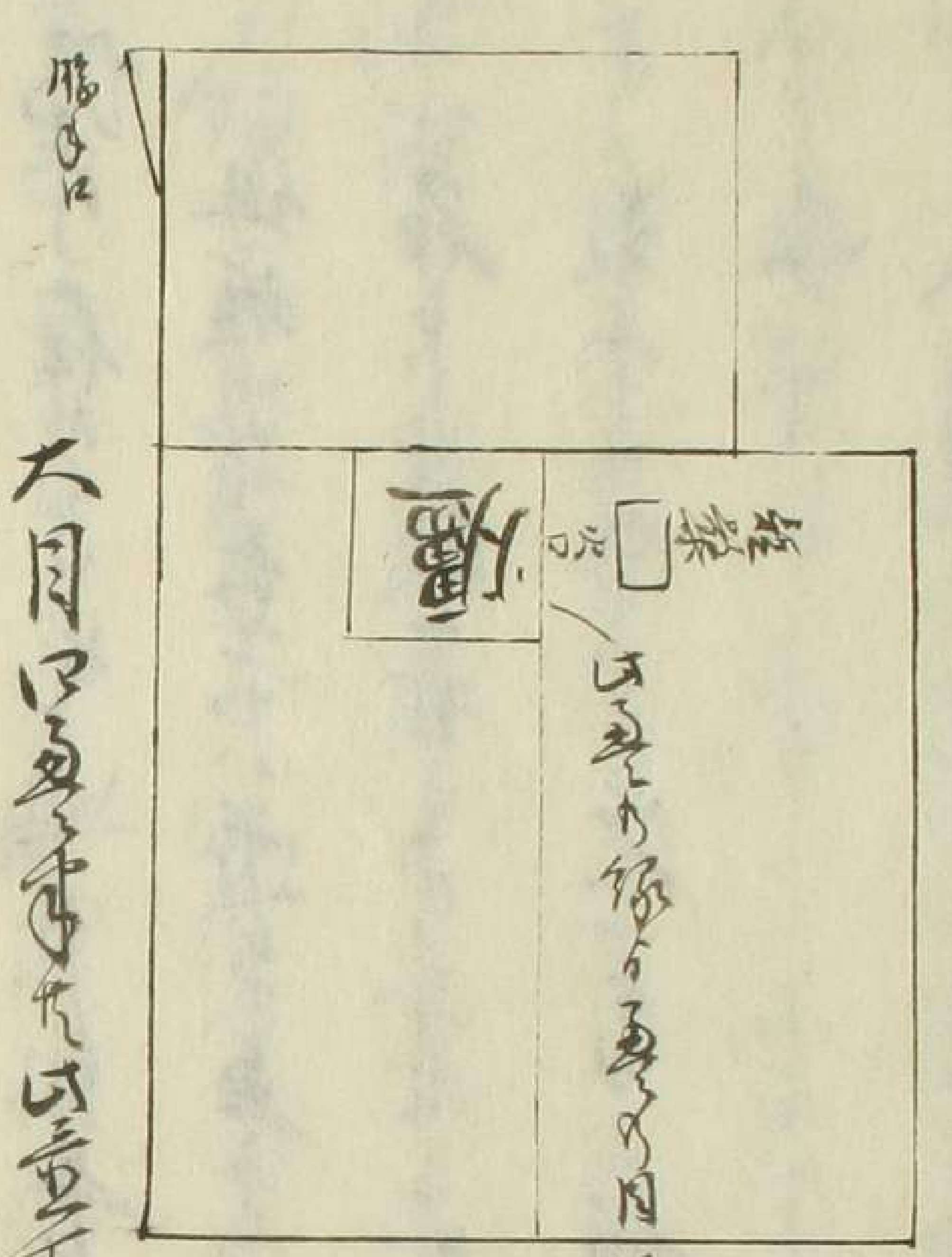
一 道具並ての上の湯き上炭を合すにハ初座後炭を二寸の

実上井ゟ上て沙鑵を釣り申事　古来ゟ之気風
ニ候なとハ見合右釜ニ付の勝手なと有之候ハゝ掛
合可然也乍去ハ上手ニ而見計ひ可然万一何
事にても有之候

一 沙鑵かけし候ハゝ半ゟ上ゟ之竹かけし掛の上ニ横
ニ細もさし宮ゟ此様子を見届け中ゟ口切より
宮中二寸斗り上ニ附る相應ニ其寛永くハ見ゆ
たる事ニ候ゆへ当りし申事ニ候
但此様子事ニ添て候ゆへ其場の窓の事ニ而
ト定て子をなるつ其なるハ候へ

一 夜会ニ雑巾置様之種々切る又ハ習ひ事有之数寄
屋の様子ニより其遺し候ハゝ花入通用之重所
頃ニたる方ニ置ハ大目四畳半ハ不苦向切ニてハ
炉の右の方ニ置可然通用之置所也
但雑巾置所ハ道具置場の勝手之席の道具物の
右の下座ニ客之方ニ而揉み置て数寄屋ニも
数寄にハ勝より先一番ニ雑巾置所を文通候て
候
又向切なとせハ其所ニてハ万一席ニ雑巾置て事も
有又雑巾の掛ニても何も様の中ニ

六ヶ敷物ハ夫成各乃薬乃隔合ニ程宜しく



大目ノ五本ニ先此通用ニ
包ハ帳乃大しヶ方ニ而も書ニ念し

一 経薬の拵様
但丹薬乃土器ハ蓋を合せ有油八分目ニさしして燈

心乃長き細長や燈ハ乳燈ノ寸燈心二色乃
内也

一 乱燈心ハ土器ニ夫を塗へ脂ニ丹薬乃柱乃穴合せ
出しさきる事の様ニ五本ニ而も柱の穴ニり
通ニ出て燈心乃長さ二州割ニして一上乃方を其
内ニ一分程を出て一結して夫ニてさけし燈ハ拵ひ
ても不掃りてし不苦

一 出来燈心ハ帰りしもさ燈心を胴乃府濃を浸けて柱ニ
並へ紙当ニしハ茶をほし上ニ而乙そこし汁
先を揃へ乙しハ糸を結へ胴ニ而柱乃穴より出しかし

なり結構なし

一　焔硝の拵一匁ニ大目ニ而茶筋二匁ニ大目ニ太六筋三
匁ニ大目ニ六七筋口匁ニ七八筋太の廻へ候
焔硝の太キ細キ沖のへしかしてそ遣て（一八程）切たる
らハ時の加減肝要へき物也

一　種薬の薬ニ盃重給有ハ蒸を火口の方よして其上
下沖さし重口を蓋の方よして一方の方より沖のつき
描ニ宜程ニ重沖さし相類書候

一　かきこ木枝ハそのて柳そす楊枝のめく四角ニけづり
頭を丸くして細くしておしつまきて楊枝ニ

様子極めし先を客の方元を下の方へさして沖さ
しつり蒸を皿の内へ元を皿の内へ入元を持ちふりけておく
くへき事

一　種薬の焔硝ハ早く取出落ちし焔硝おさへなくてハ焔
ハ出し申まて甚時ハ焔このふりそて小さくなりてそ
不見極ニおさへへし

一　焔硝おさへハかき文様なとを懸し時ハ土器の焔ハなし
かきこ木を取重ト土よりも器ニ候

一　強薬ハ世ときき拵寄風まてハ丹薬の下皿をのけて石菖味
を下皿の所ニ初程重ニ中百一有て時ハかきこ木なく

一 燈心切之ハ一の紙も小さき方當用之
夜篭なとに銘々下置古附候燈心短けれ共
其形ハ丹葉のかたりにいたし形ハ杓擬哥の字
可申事
但燈心ハ火の立申し候様なり先習可申事口傳
燈心ハ短き方よし

一 燈台ハ縁より下の所ニかまへ下事なり所より之
口ハなし人にも豆の散様のなき申し候やう能よ
し

一 手燭等も口傳可申事

但蝋燭乃大小ハ燭台の大小によりて申候奥ニ
記ス